

Title	『詩人玉屑』 版本考
Sub Title	Comparative study of the printed editions of the "Shī rén yù xiè"
Author	住吉, 朋彦(Sumiyoshi, Tomohiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2012
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.47 (2012.) ,p.149- 237
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20120000-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『詩人玉屑』版本考

住 吉 朋 彦

詩話の発達、宋代の文人に特有の批評精神の現れとも見られるが、北宋末の阮閱『詩話総龜』、南宋の葛立方『韻語陽秋』や、胡仔『漁隱叢話』等の詩話集の流布は、南宋時代の文学の大衆化に深い関係がある。特に宋末に大きな勢力となった江湖派の詩人の末流には、先人の詩法に学び、要諦を得たいと願う読者が犇ぎ、それに応じて詩話集の編纂が幾度も試みられた。そうした時勢に投じ、詩話集『詩人玉屑』を編んだ魏慶之は、字を醇甫、号を菊莊と言う。魏氏の人と為りを、本書に寄せた友人黄昇の序は、次のように述べている。

友人魏菊莊、詩家之良醫師也（中略）君名慶之、字醇甫。有才而不屑科第。惟種菊千叢、日與騷人佚士、觴詠於其間。

閣學游公受齋先生、嘗賦詩嘉之、有種菊幽探計何早、想應芳吟被花惱之句。其所好可以知其人焉。淳祐甲辰長至日、玉林黃昇叔暘序。

淳祐甲辰は、四年（一二四四）。黄氏の言に拠ると、魏氏は挙業を棄て文雅に耽り、家に千叢の菊を植え、文人隠士と詩酒を共にしたと言う。游公受齋先生は、游九功、字は勉之、受齋と号す。建陽の人。出身して宝謨閣直學士に至る。『詩家鼎鑪』卷下の游氏「題魏醇父菊莊」中にも、当該の両句が見える。¹⁾

この序の撰者黄昇は、字は叔暘。玉林、また花菴詞客と号す。彼の『花菴詞選』（唐宋諸賢絶妙詞選）及び『中興以来絶妙詞選』の総題に寄せた、淳祐九年の胡德方の序に拠ると、黄氏

もまた「蚤棄科舉、雅意讀書、閒從吟詠自適」と言い、同じく游受齋に詩を称せられた。また福建安撫使樓某により「其與魏菊莊爲友、併以泉石清士目之」と伝えられる他、韋居安の『梅磡詩話』巻下にも「菊莊與玉林黃叔暘友善。有過玉林詩云、一步離家是出塵、幾重山色幾重雲、沙溪清淺橋邊路、折得梅花又見君。亦有新意」と言い、併せて兩名交情の様が知られる。

魏慶之は、『梅磡詩話』に「建安魏醇父慶之、號菊莊」と、また方回の『桐江集』巻七「詩人玉屑考」にも「詩人玉屑二十卷、建安魏慶之醇甫所集也」とある通り、建安の人。黃氏も同郷であろう。『梅磡詩話』にはさらに、次のようにある。

建安魏醇父慶之、號菊莊。有吟稿行於世。所著詩人玉屑、編類精密、諸公多稱之。壺山詹夢璧子蒼、與之同里（中略）戊辰初春、壺山自官次貽書及寄菊莊和篇來。其中一聯云、今宵方對月何日、結忘年殊有意味。今轉盼十五年矣、聞壺山菊莊墓木皆已合抱、追思故交、爲之愴然。

詹夢璧、字は子蒼、建寧崇安の人。宝祐四年（一二五六）五十五歳で進士及第と言うから、嘉泰二年（一二〇二）の生まれ。魏慶之と同里を以て親しみ、その書簡と、魏氏との唱和詩を韋氏に送ったのは、咸淳四年（一二六八）戊辰のこと、これが魏

氏新作への唱和であるなら、『詩人玉屑』の成書より二十餘年を経て、なお存命であった可能性がある。またそれより十五年、元初の至元二十年（一二八三）には両者とも歿していた。つまり魏氏等は、概そ十三世紀中葉、宋末建安の江湖派の成員で、宋末の詩集『千家詩選』や、『聯珠詩格』にも、その作品が取られている。^②なお『聯珠詩格』の編者蔡正孫は、魏慶之の息男、天応、号梅墅と懇意であり、これらは建安文人間の、個人的な関係による入集と見られる。^③

後に蔡氏は、同じく詩話集の『詩林広記』を編んでいるが、これより先、やはり同地に隱棲した編集家の祝穆も、類書『事文類聚』各編の末に「詩話」の項目を新設するなど、宋末の建安には詩話集の編纂と版刻が流行した。魏氏の『詩人玉屑』は、淳祐四年（一二四四）頃、そうした編書の一つとして産み出され、必ずしも浩瀚な集成ではなかったが、韋氏の言う「編集精密」の故か、長きに渉り、内外に広い読者を得ていったことは、後の伝本に明らかである。

『詩人玉屑』は、中世から近世にかけ、日本文化に広く影響を与えた漢籍の一つと言える。

本書の日本への将来は、成立から百年を経ず、早く鎌倉末期

に為されている。『花園天皇宸記』正中二年（一三二五）十二月二十八日条、『統後拾遺集』の撰進について二条道平と談じた所⁴、花園院は裏書に及んで、古歌の詞句の取り様をめぐる歌論を展開し、二条為世の見解を批判する一方、京極為兼の説を重んずる立場を述べている。院は持明院統の天子として、伏見院と共に親しく為兼の説を受けているが、ここではそれを補う意味で、詩論との暗合を、次のように指摘した。

弘法大師文筆眼心、專爲兼之歌義所依憑也。近代有新渡書、號詩人玉屑、詩之髓腦也。與和歌義全不異。見此等之書、歌義自可披蒙。

院は空海の『文筆眼心抄』と共に、近代新渡の書として本書の名を挙げ『詩之髓腦』と規定し、歌論との類同を強調している。この裏書が「偏以古歌一兩句、修成新作之由語之」と切り出されている所から見て、『詩人玉屑』卷八の「沿襲」「奪胎換骨」「点化」門等、古詩の句を活かして新作を得る技法を参考したものであるかも知れない。ともかくもこれにより、鎌倉末、持明院統の宮廷で、本書が歌論の参考に供されたことが知られる⁵。

また初期の五山文学を代表する文筆僧の虎関師錬は、自作の文集『済北集』卷十一に「詩話」の項目を設け、次のように述

べている。

玉屑集、句豪畔理者、以石敏若冰柱懸簷一千丈、與李白白髮三千丈之句並按。予謂、不然。李詩曰、白髮三千丈、綠愁若箇長。蓋白髮生愁裏。人有愁也、天地不能容之者有矣。若許綠愁、三千丈猶爲短焉。翰林措意極其妙也。豈比敏若之無當玉屑乎。

これは『詩人玉屑』卷三「句法」門の「句豪而不畔於理」章の説を挙げ⁶、批判を加えつつ引用を行つたもので、鎌倉末南北朝初に於ける、本書受容の早い証跡である。ここでは、詩話を作る態度そのものが、本書を参考としていることも窺われる。江湖派の周辺に向けて供された文学論は、海外の詩人にも歓迎されて行つた。

『詩人玉屑』は、冒頭の「詩辨」門に、詩の変遷を禪宗史に譬えた嚴羽の『滄浪詩話』を置いて作文の指針とし、巻中にしばしば覚範恵洪の『冷齋夜話』を引用したり、わざわざ「禪林」の項目を設けたりして、禪僧の作品をよく扱っている。このような特質が、五山僧の趣味に投じたことは、想像に難くない。以下、五山詩僧の間で本書が広く学ばれたことは、義堂周信の『空華日工集』等⁷、禪僧の日記にも多く見られる。また室町期

に至って、禅僧手沢の版本の眉上や、抄物に引かれる例は、枚挙に遑がない。

また南朝の廷臣花山院長親が、禅林に身を置いた後に編集した歌学書『耕雲口伝』に、本書と共通する詩論の引用が見出され、能の詞章中にも、本書からの詩句の引かれた例があるとされる等、中世後期には本書の受容が周辺の分野にも広がっていった。江戸前期に至っても、例えば石川丈山の詩論に、本書の影響が認められるとの、具体的な指摘がある他、受容の跡が見出されても特に異とするには足らないほど、幅広く親しまれている。総じて言うなら本書は、唐宋文学への一の窓口として機能した他、文学史の構想から実践的な句法に至るまで、文事の諸相において、本書の資する点があったと認められる。

しかし従来、本書受容の具体相を遂うために必要な、版本系統についての理解は、全体の見取り図が描かれず、比較的脆弱な状態に置かれてきた。

『詩人玉屑』の本文について、夙に王国維が、辛亥革命後の日本滞在中、京都に於いて後掲の日本寛永十六年（一六三九）刊本を入手、また別に「宋本」を借りて校合を加え、前者を中

国に持ち帰っており、同本の題識に次のような言及がある。^①

辛亥季冬、避地日本京都、從石林書屋借得宋本詩人玉屑、因校於此本上。二本行款均同、然至二十卷、則大有詳畧。又此本以詩餘另作二十一卷。疑所出之本亦然。或宋本後有增刪歟。

王氏は本書の二十巻本と二十一巻本の相異に逢着し、後者を増刪本とする重要な指摘を遺したが、寛永刊本の成立過程については探究が為されなかった。

この王氏の校勘を礎とし、子息仲間氏が明清の諸本や「朝鮮本」との校合を加え、一九五八年に中華書局より点校本を公開すると、大陸に伝存する元明清版の殆どは、寛永刊本や王氏の見た「宋本」とは異なる不足本であったため、その意義がよく知られ、王氏校本が広く受容されるようになった。

しかし、王氏の言う「朝鮮本」とは、恐らくは後述の朝鮮明正統四年（一四三九）跋刊本のことであり、同本は、王仲間氏も言う如く、寛永本の祖本に当たることから、本書版本の系統的理解に一步を進めたが、朝鮮本の成立には日本のいわゆる五山版二種、本稿に言う日本〔南北朝〕刊無跋本と、同正中元年跋本が関係し、全体にも概要の役割を占めることが看過され

ている。

また近年、張健氏が論文「魏慶之及『詩人玉屑』考」の中に一章を宛て、版本に関する幾つかの問題を考証されている。同稿には種々有益の指摘が為されており、以下の文中、個々に触れていきたいが、王氏のいわゆる宋本を含む現存諸本には、後人の附加した部分があり、その版刻は撰者の歿後に降るとの考証は、特に傾聴に値する。^⑬ただ、わが国に流布する本文や諸版の関係、明清の流布本については、少しく補うべき点もある。そこで以下には、さらに考証の歩を進め、版種と伝本の解題を記し、その系統を総合的に論じてみたい。

本書の版本には早く「宋末元初」刊本と「元」刊本の二種が認められ、両者の下にそれぞれ系統を生じている。また日本と朝鮮には、前者の系統下に、さらに別種版本の影響を容れた二十一卷の増補本を派生した。まずその全体を表示すれば、以下の通りである。

同 〔元〕刊本

○〔宋末元初〕刊本系統

同 日本〔南北朝〕刊無跋本

同 二十一卷

日本〔南北朝〕刊〔正中元年（一三三四）跋〕本

同 朝鮮明正統四年（一四三九）跋刊本

又 後修本

又 通修本

同 日本寛永十六年（一六三九）刊（田原仁左衛門）本

又 後印（角屋清左衛門）本

又 後修本

又 正徳二年（一七一一）印（瀬尾源兵衛等）本

○〔元〕刊本系統

同 二十卷

〔明〕刊 黒口 補刻本

同 十卷

〔明〕刊本

詩人玉屑二十卷

〔宋末元初〕刊本

同 二十卷

明嘉靖六年（一五二七）序刊本

同 二十二卷

〔明〕刊本

新刻詩人玉屑二十二卷

〔明〕刊 胡文煥校〔格致叢書〕本

新刊古今錦繡詩人玉屑二十卷

〔明〕刊本

詩人玉屑二十卷 凡例〈并詩法〉一卷

〔明〕刊 汪元臣等校本

同 二十卷

〔明〕刊 汪元臣等校本

同 十卷 目一卷 補遺一卷

〔清〕刊本

又 二十卷 目一卷

增修〔處順堂〕本

又 通修〔古松堂〕本

又 道光七年（一八二七）修本

本稿では、右の十五版二十三種を対象とし、初めに宋元版二種について述べ、以下系統ごとに解説を試みる。

詩人玉屑二十卷

宋魏慶之撰

〔宋末元初〕刊

本書の原本に最も近い版本に、〔宋末元初〕刊本がある。知見二本、但し一本は残本に止まる。本版は通常、元刊本と称され、その版刻が撰者の歿後に降ることも指摘されるが、内部徴証からは、その時期を明らかにし難い。⁽¹⁴⁾

先ず黄昇序（四張）、〔上略〕友人／魏菊莊詩家之良醫師也乃出／新意別為是編（中略）君名／慶之字醇甫有才而不屑科第／惟種菊千叢日與騷人佚士觴／詠於其間（中略）淳祐甲／辰長至日玉林黃〔昇〕叔暘序〔書行〕、次行より单边亀甲形陽刻「玉林〔書録〕」、鐘形同「清則／後人（同）」、单边方形同「黃氏／圖書」印記摸刻。五行十二字、版心破損。

黄昇の伝については前述した。

次で門目（三張）、首題「詩人玉屑門目」、次行より低二、七格

にて門目を標し、「詩餘」に至る。五行十二字格。尾題同首。

卷首題「詩人玉屑卷之一」／詩辨（大字）／（紙四）滄浪謂當學古

人之詩、次行より本文、每章改行、間、引書目等を附し（字小）、

毎張左辺外耳格に門目を標す。毎編改張。

卷之一（二二張）詩辨 至 詩法

卷之二（二八張）詩評 至 詩體

卷之三（二八張）句法 至 本朝警句

卷之四（二八張）風騷句法 至 詩有四鍊

卷之五（二二張）口訣 至 初學蹊徑

卷之六（二〇張）命意 至 下字

卷之七（二四張）用事 至 屬對

卷之八（二二張）煅煉 至 點化

卷之九（二三張）托物 至 白戰

卷之十（二二張）含蓄 至 知音

卷之十一（二三張）詩病 至 考證

卷之十二（二七張）品藻古今人物 至 絕句

卷之十三（一九張）品藻古今人物 至 靖節

卷之十四（二三張）謫仙 李杜 草堂

卷之十五（二五張）王維 至 常建

卷之十六（一九張）香山 至 晚唐

卷之十七（二八張）西崑體 至 雪堂

卷之十八（二五張）涪翁 至 王仲至

卷之十九（二四張）中興諸賢

卷之二十（二二張）禪林 方外 閨秀 靈異 詩餘

四周双辺（一九・一×一二・〇）有界、毎半張十一行、行二十一字、耳格あり。闕筆、玄貞慎姫（卷十九第五張末行）。版心、

小黑口（接内）双黒魚尾（向対）問題「玉屑（玉）幾」、張数。尾題「詩人玉屑卷之幾」（図版二）。

姫字は度宗（諱祺）の嫌名、即ち本版は、宋末度宗朝（一二

六四—七四）以後の版刻である。¹⁵

六四—七四）以後の版刻である。¹⁵

〈台北・国家図書館 一四七四七〉

〔室町末近世初〕訓点書入 清張鈞衡旧蔵

分十冊

新補藍色表紙（二六・七×一六・一）改糸、淡青包角。金

鑲玉装、原紙高約二二・七。旧時裏打改装。前後見返し、副

葉宣紙。卷六第四至五、十四、十六至二十張、卷十三第十、十

二至十四、十七張（清末民国）鈔補、卷二十尾「舊詞」章に至

り、尾題鈔補。

〔室町末近世初〕朱豎句点、同朱墨欄上校改、校注、同墨返点、連合符、音訓送り仮名書入、卷十七第九張前半「石曼卿」条鈔補。每葉右下方に「幾之幾」と卷張数を書す。卷四第二、三張間に「暖過杏花稀、無衣林夜寒」と墨書せる新箋を差夾む。奇数冊首右辺外に「捻計九冊(五冊)」と朱書。每冊首に単辺楷田形陽刻「擇是居」、目首に方形陰刻「張印／鈞衡」、單辺方形陽刻「石銘／收箴」、每卷首に方形陰刻「張印／鈞衡」、單辺方形陽刻「石銘／秘笈」、每冊尾に同「吳興張氏適園收藏圖書」朱印記(以上六顆、張鈞衡所用)、目首、第二冊首に鼎形陰刻「菊生」朱印記あり。

張鈞衡、字は石銘、適園と号す。浙江吳興の人。清末民国期の藏書家。清同治十一年(一八七二)生、民国十六年(一九二七)歿。但し日本伝来本。

〈北京大学図書館 □九九〉

一冊

存卷四至七 清周春識語 袁芳瑛 李盛鐸旧藏

新補素表紙(二三・五×一五・八糎)右方打付に「詩人玉屑(宋刻一冊／殘)」と書す。襯紙改装、原紙高約二一・五糎。前後副葉。卷六第十九張鈔補、第十七、二十張欠。卷四首匡郭一八・八×

一二・〇糎。

朱傍圈、傍点、校改、墨傍点、行間評注、傍線書入。前副葉後半「此宋刻之最劣者書既不全又遭塗抹然偶一開卷便覺楮墨間有古樸之趣甚矣宋刻之可愛也」墨識、次行下方形陰刻「松／靄」、首に單辺方形陽刻「松／靄」、方形陰刻「周／春」、單辺方形陽刻「内樂／邨農」朱印記(以上四顆、周春所用)、方形陰刻「古潭州／袁臥雪／廬收藏」朱印記(袁芳瑛所用)、單辺方形陽刻「雲／間」朱印記、方形陰刻「沈印／鴻祚」朱印記、卷四尾單辺方形陽刻「木齋／宋元／秘笈」朱印記(李盛鐸所用)あり。

同

〔元〕刊 覆(宋末元初) 刊本

黄序以下、底本に同じ。本文も、簡略な異体字の使用が増加し、後述するような文字單位の異同を存する他、大きな變動はない。但し著録は後掲の北京大学図書館蔵の一本のみ、本版の全形に臨み得ていないが、その限り、首の門目は「宋朝」「宋〔中興諸賢〕」「〔内傾斜〕」に至り、詩餘を載せない。また卷首大字の門目下に「〔第一〕」等の序数を附す。さらに、卷三第二十三至

二十四張以下に欠損があるのを補わず、版心の張数を「廿三之廿五」と弥縫する等の相異がある。卷十二以下には殊に欠張が多く、これらが原損であるのか、後時の欠損であるのか、印刷時の糊塗であるのか、明らかでない。試みに知る限りの全容を挙げれば、左の通りである。なお卷一至二、五至九については底本に同じ。

卷之一（一二張）

卷之二（二八張）

卷之三（一至「廿三之廿五」至二十八張）

卷之四（一至「九之十一」至十八張）

卷之五（一二張）

卷之六（二〇張）

卷之七（二四張）

卷之八（二一張）

卷之九（二三張）

卷之十（一至「十五之十七」至二十二張）

卷之十一（一至「二之四」至十三張）

卷之十二（存三至「六之八」至「十之十二」張）

卷之十三（存四至「九之十」、又三張）

卷之十四（存「一」至「八」張、首題欠）

卷之十五（存一至三、五至十六、又一張）

卷之十六（存一至九張）

卷之十七（存一至八張（以下欠）

左右双辺（一九・一×二二・一糎）有界、十一行、行二十一字。版心、線黒口、上象鼻字数、下象鼻大小字数あり。

本版の本文を、卷一の範囲について底本に比較すると、「詩辨」「詩法」の門目下にそれぞれ「第一」「第二」と標記する他、第五張前半第十一行（以下「五前十一」等と略記）「字字皆奇古」を「皆皆奇」、六前十一「學竟無方作無略」を「無路」と誤り、三後十左「漢」、四後二左「興」、同三右「蕭」、同左「無」、同十一「關」、八前五・六「禪」、十一前九「辭」、同十「盡」、同後五「聲」、十二前二・同後六「體」、同前三「變」字を各略体、五後十・十一、十一前二「清」、十前二「情」字を各正体とする。全体に底本の字体を略する例が散見する他、若干の誤刻を存する他は、〔宋末元初〕刊本に忠実であり、その覆刻と見られる（図版二）。

〈北京大学図書館 □九〇七七〉

五冊

欠卷十八至二十 清袁芳暎 李明埤盛鐸滂旧蔵

新補藍色表紙(二三・九×一五・七糎)。糊紙改裝。前二、後副

一葉。前述のように、該本の欠損は元來のものか、後世の逸脱か、判明し難いが、一応、底本を標準として記せば、以下の通りである。卷六第二十張(尾)、卷十二第一至二、十三至十七張、卷十三第一至三、十四至十九張、卷十四第一至九、十八至二十三張(「草堂」以下の現存の張子版心に第一至八と印字)、卷十五第四、十七至二十七張、卷十六第十至十九張、卷十七第八至二十七張(尾題下に「全終^(陰刻)」と後印)欠。

朱豎傍点書入。前副葉並に首に方形陰刻「古潭州／袁臥雪／廬收藏」朱印記(前出)、每冊首、卷五、九、十一首に单边方形陽刻「談氏延／□樓／收藏印」朱印記、目首、卷首、每冊首に同「世纓／代簪」朱印記、目首に同「麗漢樓」朱印記、卷首に方形陰刻「金瑾／印」、单边方形陽刻「炳文／氏」朱印記(以上二類、金瑾所用)、目首に同「李氏／玉陵」、方形陰刻「明埤／之印」(以上二類、李盛鐸父明埤所用)、单边方形陽刻「木犀軒／藏書」、卷首に方形陰刻「李印／盛鐸」、单边方形陽刻「木／齋」朱印記、每冊尾に同「李印／傳模」朱印記(以上四類、李盛鐸所用)、目尾、卷十七尾に方形陰刻「李／滂」、单边方形

陽刻「少／微」朱印記(以上二類、李盛鐸男滂所用)あり。⁽¹⁹⁾

○〔宋末元初〕刊本系統

同

日本〔南北朝〕刊 覆〔宋末元初〕刊本

本版は〔宋末元初〕刊本の忠実な翻刻本であり、年時の接するであろう〔元〕刊本には拠っていない。川瀬一馬氏のいわゆる無跋本に相当する。⁽²⁰⁾黄序版心題「玉屑序^(書行)」、門目同「玉屑門目」。本文内容は底本に大同であるが、卷十一の版心張数を一至「十^(刻陰)」、十一、十二(計十三張)とする小異がある。

四周双边(一八・六×一二・〇糎)有界、款式は底本に同じ。版心、線黒口^(糊接内)、单黒魚尾下題「玉屑幾」、張数。三張掛け、下象鼻に間々工名、卷七第十四至十九張、卷八第十四至二十一張(尾)、卷九第一至四張、卷十八第十四至十九張、卷二十第十三至十八張に「仲」、卷十七第二十四至二十八、卷十八第一張に「伯」と刻す。なおこれらの工名出現の様相は、一面三張

の両面彫り、即ち六張一版の形木に拠ることを強く示唆している。尾題同首、大尾題「詩人玉屑卷之二十(終)」(図版三)。

この「仲」「伯」は、貞治六年(一二三六)に来朝した刻工集団の成員とされる陳仲、陳伯寿の略名であることから、本版もそれ以降の版刻と見られる。

本版卷一の本文を底本に比較すると、十後二「體物不欲寒乞一意中有景景中有意」を「意中」と、「一」を空格とし、同三「涵養未至也」を「未至」と誤り、十二後七「不必争以己詩置古人詩中」を「已詩」と誤る他は、字体に至るまで、殆ど忠実に底本に従っており、底本に次いで原態に近い版本と言える。

〈お茶の水図書館成篋堂文庫〉

卷五至六配同版本 相国寺長得院 島田家旧蔵

十冊

後補淡洪引表紙(二五・三×一七・二糎)左肩に淡茶色卷雲文刷題簽を貼布し、室町期の筆にて「詩人玉屑(幾之幾)」と書す。左下方打付に別筆にて「十策之内」と書す。前冊前表紙下辺より紙箋を附して「一〇四」と書し、单边方形陽刻「(有字)徳富氏／圖書記(書)」朱印記(徳富蘇峰所用)を存す。改糸、裏打修補、原紙約二四・四×一五・一十一四・八糎。後見返し上辺より紙

箋を附し「逗子」と書す。前後副葉。黄序、門目を存し本文。毎冊二卷。卷三第四、三張錯綴、卷十六第十一張、卷十八第二十五張(尾)欠。

〔室町〕朱豎傍句点、傍圈、同墨返点、連合符、音訓送り仮名、声圈、行間欄上校改、校補注書入あり。縹色不審紙。卷十九第十六張中に(江戸初)墨筆にて別本に存する「病僧」章を移写した厚手切紙を差來む。卷一尾題前「是書往歳予所獲卷首捺先君子図章者記不／忘其原也癸卯二月島田翰識廿又五」(癸卯は明治三十六年(一九〇三))、卷四首題下「島田翰彦楨氏珍藏」、卷十首題下「島田翰珍蔵」、卷十七尾題前「予所藏古文旧書皆是往歳太夫人以重價所購是書／亦其一也島田翰記」墨識。第六、七冊首題下に方形陰刻「長得院(書)」朱印記を鈐するも、後出島田翰印記を重捺、毎冊首に单边方形陽刻「篁邨島／田氏家／藏圖書」、第六冊首に单边円形陽刻「島田／澄」、方形陰刻「島田／重禮」、单边方形陽刻「敬／甫」朱、大尾本文後に同「島田氏／雙桂園／藏書記」墨、毎冊首並に目首、卷七尾、卷二十首に方形陰刻「島田翰／讀書記」朱印記(島田翰所用)、首に单边円形陰刻「T. / I.」、毎冊首に单边方形陽刻「徳富／猪式郎／之章」、方形陰刻「蘇峰／清賞」、方牌中方形陽刻「蘇峰

／文庫」朱印記、毎冊尾に単辺方形陽刻「蘓峰／學／人」朱印記（以上五顆、徳富蘇峰所用）を存す。卷七第十五、十六張間に明治三十七年四月発行「第廿一回勸業債券募集廣告」鉛印紅紙、「^{（低）}御話頭書／一改革前政府之状況」書き止し切紙等反故を用いた「詩人玉屑紙折」を差夾む。²²⁾

〈台北・故宮博物院楊氏觀海堂藏書〉

卷七至二十一配日本〔南北朝〕刊正中元年跋本

建仁寺久昌院 杉本恒篠旧藏

十冊

後補浅葱色艶出表紙（二三・六×一五・五糎）、書口「^{（每字改行）}宋槧詩人玉屑」と書す。改糸。襷紙改装、天地截断。見返し、副葉新補。首冊前見返しに楊氏影像を貼附、単辺方形陽刻「星吾七／十歳小像」、方形陰刻「楊印／守敬」朱印記を存す。黄序、門目を存し本文。第十冊に三卷を収める他は、毎冊二卷。

全編に〔室町〕朱合堅句点、返点、連合符、音訓送り仮名、欄上行間に同朱墨校改、校補注書入、間々〔室町末〕朱傍圈、同黒欄上補注書入あり。淡紅不審紙。毎冊首右辺外に〔室町〕期の墨筆にて「近江州野洲郡播磨田郷歸郷院常住也心査置之全部惣計十冊内」識語あり。毎冊首に方形陰刻「久昌院／藏書」朱

印記（建仁寺久昌院所用）、単辺方形陽刻「杉恒篠／珍藏記」朱印記、首に方形陰刻「京都／楊氏藏／書記」、毎冊首および目首に単辺方形陽刻「星吾海／外訪得／秘笈」朱印記（以上二顆、楊守敬所用）、卷首尾に方形陰刻「朱師／轍觀」朱印記を存す。²³⁾

〈お茶の水図書館成簀堂文庫十冊本のうち〉

卷一至四七至二十配同版本 島田家旧藏

卷五至六を存す（十冊のうち一冊）。原紙約二三・七×一四・一十一四・一糎。朱堅句返点、連合符、墨音訓送り仮名、欄上行間校改書入。卷五尾題後「明治己亥盛夏獲之於新井政毅／^{（低）}島田洸」墨識あり。明治己亥は三十二年（一八九九）。全体に関わる事項は配本の項に前掲した。

同 二十一卷

日本〔南北朝〕刊（正中元年（一三三四）跋）

覆〔南北朝〕刊無跋本

前版のさらなる覆刻本で、川瀬氏のいわゆる有跋本に相当する。²⁴⁾ 卷十九まではほぼ忠実な翻刊であるが、卷十二第五、六張

は本文の順序が入れ違っており、第四、六、五、七の順に接属する。また卷二十には大幅な増補があつて、卷二十一を分出し、底本の系統とは相異がある。次に末尾二巻のみを掲出する。

卷之二十 (二〇張) 禪林 方外 閨秀

卷之二十一 (二一張) 靈異 詩餘 中興詞話

卷二十「閨秀」の本文後一行を隔て、第二十張前半第八行に「詩人玉屑卷之二十」の尾題があつた後、同張後半の最末行に「詩人玉屑卷之二十一」と題するのは、次張以下に掛かる首題の意であろう。次張は首に二格を低し「靈異^(大字)」以下本文。

四周双辺(一八・六×二一・〇) 有界、款式同前。版心、線黒口^(接内) 双黒魚尾^(向対) 問題「玉屑幾」、張数。三張掛け。前版の耳格や版心の工名も模刻するが、卷八第二十二至二十一(尾)、卷九第一至四張、卷十七第二十四至二十八、卷十八第一張、卷二十第十三至十八張の工名は見られない。これら工名の消滅も六張を単位とするから、版木の様式も底本に同じと見られる。^(三) 大尾題「詩人玉屑卷之廿一」。

大尾題目より一行を隔て、二格を低して「本云^(以下更)」 茲書一部批點句讀畢胸臆之決錯謬多焉／後學之君子望正之耳／正中改元臘月下澣 洗心子 〈玄惠〉誌 識語を附刻す(図版四)。

正中改元の第一年は西暦一三三四年。洗心子玄惠とは、天台密教を修めた後、持明院統の殿上に入出し、漢籍の談義や詩歌の会合に加わり、武家や五山僧にも名を知られた、玄惠法印その人と考えられる。

この識語の内容は、正中元年、玄惠が本書に批点や句読を加えたとの由であるが、持明院統の周辺で、当時すでに本書が知られていたことは、先に見た『花園天皇宸記』正中二年の記事に明らかで、院の周辺で漢学者として知られた玄惠に、本書への加点を求めることは充分にあり得たから、識語自体はある程度信すべきもののように思われる。

しかし「本に云はく」とある通りならば、(南北朝)刊有跋本の底本は、玄惠加點本そのものではない可能性があり、より重要な点として、現に本文中には、玄惠の加点に関わる内容は、全く認められないことが指摘される。本版の底本が来朝刻工の手に係ることを考えると、その版刻は南北朝半以降で鎌倉末には遡り得ず、この有跋本も南北朝後半以降の刊行と見なければならぬ。従つてこの跋は、観応元年(一三五〇)の玄惠歿後、その名聲に因んで附刻されたと見られよう。

さて本版の本文は、卷一について底本に比べると、三後十一

左「謂古律之體備也」を「舌律」、十前一「載始末曰引」を「始末」、十一前一「只求工於句字亦未矣」を「未矣」と誤り、十前六「三百篇美刺」を「美刺」、十後三「涵養未至也」を「未至」と正し、十後二「體物不欲寒乞」意中有景景中有意」を「一意中」に作る。最後の例は、底本の空格の方が意を通じ易いが、「一」は「宋末元初」刊本に同じ。また三後四、七前七「清」を略体にする相異がある。総じて底本に忠実ながら、僅かに翻刻の誤りを増す一方、底本の誤りを正した点も認められる。

また本版は、底本に比べ、末尾に「中興詞話」門を増加している。これはその門目の直下に小字を以て「並係玉林黃昇叔／陽中興詞話補遺」と注することから、本邦中世期の編刊というわけでは、ないようである。恐らくは本版所依の的本において、本書に序を寄せた黄昇氏の名を体した、版元による増編が行われたのであろう。この点、「宋末元初」刊本には全くその証跡を有たず、「元」刊本は、前出唯一本の北京大学図書館蔵本が末尾を佚し、その門目も、北宋代詩餘以前の「宋中興諸賢」に終わって明晰を欠くものの、本版を以て、増補の本文を窺い得ることは幸いである。

また本版の卷二十至三十一間の本文は、単に新編を増加した

のみではなく、「禪林」「閨秀」「詩餘」の諸門においても、新たにその記事を増益している。以下に原本（「宋末元初」刊本および日本〔南北朝〕刊無跋本）と本版の編章を列挙対照し、その相異を確認して置きたい。連属するため章目を欠く場合には「―」符を用い、章目下括弧内にその典拠、アラビア数字を附記して、章目を含めたその行数を示す。

無跋本

（卷二十）

【禪林】

酸餽氣〈石林詩話〉 10

無蔬筍氣〈西清詩話〉 9

靈徹〈雪浪齋日記〉 4

―〈集古録〉 3

船子和尚〈冷齋夜話〉 6

道潜〈冷齋夜話〉 17

―〈高齋詩話〉 3

仲殊〈雲齋廣錄〉 3

有跋本

（卷二十）

【禪林】

酸餽氣〈石林詩話〉 10

無蔬筍氣〈西清詩話〉 9

靈徹〈雪浪齋日記〉 4

―〈集古録〉 3

船子和尚〈冷齋夜話〉 6

道潜〈冷齋夜話〉 19

―〈高齋詩話〉 3

仲殊〈遺珠〉 7

―〈雪齋廣錄〉 2

惠洪	《遺珠》	3	惠洪	《遺珠》	6	志南	《柳溪近錄》	5	病僧	《庚溪詩話》 ⁽²⁾	5
—	《復齋謾錄》	9	—	《許彥周詩話》	7	圓悟	《柳溪近錄》	4	病僧	《庚溪詩話》	5
—	《冷齋夜話》	9	—	《雪浪齋日記》	4	病僧	《庚溪詩話》	5	（前出）		
—	《雪浪齋日記》	5	—	《冷齋夜話》	11	【方外】			【方外】		
—	《冷齋夜話》	2	—	《冷齋夜話》	9	（略）			（略、全同）		
—	《冷齋夜話》	10	—	《冷齋夜話》	10	【閨秀】			【閨秀】		
清順	《冷齋夜話》	7	清順	《冷齋夜話》	7	（後出「費氏」）			雙頭牡丹	《許彥周詩話》	3
—	《復齋謾錄》	8	—	《復齋謾錄》	8	（後出）			費氏	《王平齋詩話》	18
癡可	《西清詩話》	5	癡可	《西清詩話》	5	薛氏	《唐宋遺史》	7	國亡詩	《後山詩話》	6
—	《漁隱》	4	—	《漁隱》	4	慎氏	《唐宋遺史》	5	七歲女	4	
—	《柳溪近錄》	3	—	《柳溪近錄》	3	二十八字媒	《直方詩話》	5	（前出「國亡詩」）		
顯忠	《洪駒父詩話》	4	顯忠	《洪駒父詩話》	4	費氏	《後山詩話》	6	（前出）		
—	《詩說雋永》	3	慶老	《詩說雋永》	3	七歲女	《後山詩話》	4	（前出）		
—	《復齋謾錄》	4	—	《復齋謾錄》	4	荆公女	《冷齋夜話》	15	李易安	《詩說雋作》	5
—	《塵史》	5	—	《塵史》	5	（前出）			荆公女	《冷齋夜話》	4
—	《古今詩話》	5	—	《古今詩話》	5						

陸放翁
13

范石湖	6
辛稼軒	11
辛稼軒馬古洲	6
馬古洲	7
楊誠齋	7
廬申之	9
朱希真	6
劉伯龍	14
龍州道人	9
劉招山	7
戴石屏	13
游寒岩	7
游龍溪	9

右のように、本版では末尾の「中興詞話」門全十六章の他「禪林」門に九章、「閨秀」門に八章、「詩餘」門に十章を増加している。

この巻二十の共通部分に於ける、本版と底本との異同を検討して見ると、「閨秀」門目下に「女類也」三字を存し、同「費氏」

章目を「國亡詩」に作り、「詩餘」門「林和靖」章末に「雲溪友議」と標する上、二後二「滿目青山載月明歸」を「明月」、三後三「雲齋廣錄」を「雪齋」、四前六「詩語清婉」を「詩話」、五後三「閑眠盡日無人到」を「人對」、六前二「塵史」を「塵史」、六後五「庚溪詩話」を「庾溪」、十後八「莫訝杖藜歸去早」を「杖藜」、十一後四「花嫩不禁纖手捻」を「花漱」、十二前七「漸覺鬢凋殘」を「洞殘」、同十一「王史嚴濯夫娶之」を「灌父」、十三前七「所嗟人異鴈」を「異珪」、十八後七「玉骨那愁瘴」を「愁瘴」、十九前八「非胷中有萬卷書」を「胸中」、同後三「多情却被無情惱」を「多情惱」、二十後八「依前被風扶起」を「前枝」、二十一前二「陌上飛花正滿」を「陌上」に誤る一方、六前四「古木陰中繫短蓬」を「短蓬」、十九後一「綠水人家曉」を「人家曉」と正し、六前四「杖藜扶我過橋東」を「溪東」に作り、十二後十一「太祖」の空格を略し、十三前二「更無一箇是男兒」を「寧無」に、十八後八「自清涼無汗」を「無汗」、同十「淺碧鱗鱗露遠洲」を「鮮鮮」、同十一「諸詞」を「凡此十餘詞」、十九前三「是何比況愈下」を「每況」、同十一「花褪殘紅青杏小」を「青杏少」、二十一前二「尋芳來較晚」を「尋春」に作る。また出現箇所は略するが、「爲」「靈」「船」「處」「齋」「數」「游」「翠」「建」「煙」

「巖」「麗」「觀」「鍾」「箇」「兒」「惡」「權」「羣」「萬」「鼓」「憐」「牀」
「青」「藥」「爾」「晴」「冰」「來」「第」「館」字を略体等の異体
字とし、疊語の下字を「ミ」号とする一方、「蓋」「国」「声」「齋」
「蟬」「棲」字を正体とする相異がある。

これらの異同を見ると、次の二点が注意される。先ず第一に、
卷二十共通部分における底本との相異は、卷十九以前の様相と
全く異なっている。既に卷一について見た通り、本版は底本に
かなり忠実で、僅かに正誤を生ずるのみ、字体のレヴェルに至
るまで相異は極少数であったのに、この卷二十では両者の違い
が殊に多い。これは、全体には〔南北朝〕刊無跋本に拠りなが
ら、卷二十以降については別本の影響を容れたことを示してい
る。これを証すべき明初以前刊行の別本の存在は、今のところ
検出することができない。しかし、少なくとも「禪林」門につ
いては、後述の〔明〕刊黒口本以下に、本版と同様の増補を含
む版本があり、これらが全く本版に独自の増補とは見られない。

もう一点、卷二十中の異同の箇所に注意すると、これらは僅
かな例外を除いて、第一至六張の「禪林」門、第十二至十三張
の「閨秀」門、第十七至二十一張の「詩餘」門に集中しており、
「方外」「靈異」門には異文が稀であって、字体の採用について

も同様の現象が指摘される。このことは、「禪林」「閨秀」「詩
餘」門には増編があつて、「方外」「靈異」にはそれがないこと
と、恐らくは同根であろう。

推断は避けなければならないが、本版は卷二十についても、
元來は〔南北朝〕刊無跋本を基としながら、別本に増加のある
編章と、無跋本にはない「中興詞話」門について、別本の本文
を採用したのではないか。別本が二十一巻の本文であつたのか
どうか、知るに由ないが、〔宋末元初〕刊本以來の原本と、後
の増補本が、この〔南北朝〕刊有跋本の末巻に於いて合成され
たのである。そして、この版本が直接の淵源となり、朝鮮と日
本の流布本を生じたことは重要であり、本書版本の系統を分け
たことは特筆される。但しその伝本は少なく、上記は後掲の三
本によつて著録した事柄である。

〈京都大学附属図書館 四一〇六・シ一・貴〉

十冊

河野鉄兜旧蔵

後補洪引表紙（二五・〇×一八・五糎）左肩題簽剝落痕、打付
に「詩人玉屑（幾之幾）」と書す（首冊のみ別手）、右下方綫外
打付に「共十冊」と書す。首冊のみ右方綫内打付に又別筆にて

「共」十冊（六十一ノハコ入）明王院」と書す。押し八双あり。改糸。見返し新補。黄序、門目を存し本文。第六冊に三巻を収める他は毎冊二巻。卷二十四、三張錯綴。

間、「室町末近世初」朱豎傍句点、傍圈、傍線、音訓送り仮名、稀に欄上墨校改書入、全編に「江戸初」朱ヲコト点（博士家点）、返点、連合符、音訓送り仮名、校注校改、欠文鈔補書入。淡代緒色不審紙。毎冊尾左辺外に「室町」期の墨筆にて「施入 聖光禪寺 祖西」識語、朱もしくは墨減。卷十二第五張右辺外に「此丁翻轉可在後」墨書。毎冊首に単辺方形陰刻「叔」朱印記を存するも、朱もしくは墨減、同じく単辺円形陽刻「越」朱印記、同方形二層「故鐵兜河ノ野罷遺書・男河野天瑞寄贈」（書楷）緑印記、同円形「（書楷）（書外）明治三四 七 二八 民贈・（書内）京大

圖」朱印記を存す。

河野鉄兜、名は維熊、字は夢吉。播磨の人。文政八年（一八二五）生、江戸に遊学の後、播磨林田藩儒医となる。また詩歌を能くす。慶応三年（一八六七）歿。

〈東洋文庫 二・B・d・9〉

南禅寺正因庵旧蔵

十冊

新補雷文櫛雨龍文空押艶出古丹表紙（二三・八×一五・〇糎）左肩に題簽を貼布し「詩人玉屑」「幾」と書す。改糸、裏打修補、天地截断。黄序、門目を存し本文。第十冊に三巻を収める他は毎冊二巻。もと末尾二張を欠き、本版と同款式を以て鈔補、さらにこれに換えて、後掲の朝鮮朝の翻版二張を配し、鈔本は後見返しとの間に差し夾む。卷首匡郭一八・五×一一・八糎。

卷一至二に「江戸初」朱標圈、豎句点、返点、連合符、音訓送り仮名書入、卷三以下に「江戸初」別筆による朱標豎傍句点、傍圈、同墨返点、連合符、音訓送り仮名、欄上校改、校補注書入あり。淡黄色不審紙。毎冊尾に墨筆花押を存す。毎冊首に単辺方形陽刻「正因／禪庵（録家）」朱印記（首冊のみ刪去、南禅寺正因庵所用）、目首に同楕円形「貴池鐫／世珩段觀」、卷首並に第十冊首に方形陰刻「蕙石讀書記」朱印記（以上二顆、劉世珩所用）、第二、七冊首に双辺方形陽刻「閑」朱印記、毎冊尾に単辺同「雲邨文庫」朱印記（和田雲邨）あり。前掲の朝鮮版に拠る大尾後半張の欄上に「卷末二頁ノ韓本（五山版ノノ覆刻）ニ依／テ補フ／雲村」朱識を存す。（書）

劉世珩、字は聚卿、蕙石と号す。安徽貴池の人。清同治十三

年（一八七四）生、光緒二十一年（一八九五）挙人。清末民国期の蔵書家、民国十五年（一九二六）歿。

〈台北・故宮博物院楊氏觀海堂蔵書のうち〉

卷一至六配日本〔南北朝〕刊無跋本

建仁寺久昌院 杉本恒修旧蔵

卷七至二十一を存す（十冊のうち四冊）。全体に関わる事項は無跋本の節に前掲。

同

朝鮮明正統四年（一四三九）跋刊

覆日本〔南北朝〕刊正中元年（一三二四）跋本

前記〔南北朝〕刊本二種のうち、後出の有跋二十一巻本を覆刻した朝鮮版である。但し版式には小異がある。⁽²⁶⁾

左右双边（二・七・八×一二・二）有界、款式は底本に同じ。版心、小黒口。耳格、工名は欠くが、卷十八第十四至十五張のみ、底本の「仲」字が残っている。また本文末尾題後に正中元年玄恵跋を、底本のままに遺存する。

次で尹炯跋（一張）、三格を低し、諱字改行にて首行より本文「（上略）恭惟我／^(三)主上殿下尊崇正學丕闡至治又／^(二)念詩學之委靡／思欲廣布此書以振雅正之風歲在丙辰出經筵所／藏一本爰／^(二)命都觀察使臣鄭麟趾／^(二)繡之梓而壽其傳始刊于清／州牧年歲適歉未即訖功越四年夏季臣炯承／乏以來觀其舊本頗有誤字乃敢具辭／上／^(二)聞即／^(二)命集賢殿讎正以下臣雖荒蕪末學監督惟謹事已告成（中略）正／統己未冬十一月 日嘉善大夫忠清道都觀／察黜陟使兼監倉安集轉輪勸農管學事提調／刑獄兵馬公事臣尹炯拜手稽首敬跋」。版心題「跋」。

明朝正統己未四年（一四三九）は朝鮮朝の世宗王の治世第二十一年に当たる。鄭麟趾、字は伯暉、學易齋と号す。河東の人。朝鮮太祖五年（一三九六）生、太宗十四年（一四一四）文科及第。太宗より成宗までの七朝に涉つて重用され、世宗朝では始め集賢殿直提學、藝文官提學等を拝して経筵に侍し、十八年（二四三六）に忠清道觀察使に任じ、翌年再び藝文館提學に遷つた後、次第に右議政に進み、世祖朝に領議政に昇る。成宗九年（二四七八）歿。また尹炯、字は仲晦、坡平の人。鄭氏よりも少しく年長で、高麗辛禔王十四年（一三八八）生、朝鮮世宗二年（一四二〇）文科及第。知諫院副承旨より同二十一年（明正統四年、

一四三九）鄭氏の跡を襲って忠清道觀察使を拝し、翌年藝文館提學に任じ帰還、のちに同大提學に至り、端宗元年（一四五三）に歿した。尹跋によると、始め世宗は忠清道清州に赴任する鄭氏に、経筵藏書より一本を授け本書の版刻を命じたが、不作の年に当たって、鄭氏が任中にはこれを果たせなかった。そこで尹氏がこれを継ぎ、旧本には誤りが多いことを上聞に供すると、世宗は集賢殿の學官に命じて校正を加え、その本を再度下したので、尹氏監督の下、世宗二十一年、即ち明正統四年に版刻を遂げた、というのである。

次で列銜（第二張）、首三行無文、第四行下辺より「權知戸長金斗／都邑／金乳信 河叔康 記官中今／朴超」以下、刻手（林禹山以下三名）、校正（林薈以下四名）を挙げ「嘉善大夫（中略）（臣）尹炯」に至る。版心同前（図版五）。

右の跋と列銜を見ると、本版は忠清道の刊行に係るものと解され、別に類版は認められない。注（26）藤本幸夫氏著書に拠ると、校官に清州儒學教授林薈が加わっていることから、清州での刊行と見られ、各地の冊板を著した『攷事撮要』は、清州ではなく、近傍の堤川に本書を録するが、両所での刊行は考え難く、清州から堤川に板木が移されたと考えの方が穏当かとさ

れる。

世宗朝に各道の觀察使が、経筵藏本に基づく翻刊広布の任務を負ったことは、慶尚道（慶州、密陽）における宣徳九年（一四三四）の『古今韻會舉要』刊行、江原道（江陵、原州）における正統二年（一四三七）の『韻府群玉』刊行にも認められる所で、中央の主導による大きな出版運動の一環であったことが指摘される⁽²⁷⁾。

本版の本文は、ほぼ底本に従うが、卷一について挙げると、十前一「始未曰引」を「始末」、十一前一「只求工於句字亦未矣」を「未矣」と正し、七前四「青」字を略体とする相異がある。全体に本版の誤字は底本に従い、独自に改めた点が認められるから、朝鮮朝校官の見識が、若干は示されたと言えようか。日本と韓国に、その伝本は比較的多く、少なくとも二次の修刻が加えられたと知られる。

〈国立公文書館内閣文庫 三六三・九〇〉

八冊

朝鮮宋璫 日本林家旧蔵

黄檗染出繫唐草文空押艶出表紙（二五・四×一五・三横）左肩打付に「詩人玉屑（幾之幾）」と書す。首冊のみ題簽を貼布し別

筆にて「詩人玉屑」序目／「二之三」と書し、右下方に双辺刷枰の小簽を貼布、「文史 一ノ四」と朱書す。また毎冊中央に旧藏書票二種を貼附す。改装。本文楮紙、添料を塗布し淡黄色とす。黄序、門目を存し本文。第三至四、六冊に各五卷、第五冊に四卷を収める他は、毎冊二卷。末尾に尹跋、列銜を存す。

卷四、九尾に「礪良宋氏家藏」と、卷十四、十七尾、大尾に「礪山宋氏家藏」と細書し、卷十七尾を除いて下記宋氏印記二顆を存す。首、卷五、十、十五、十九首並に卷四、九、十四、十八

尾、大尾に単辺方形陽刻「壺山／宋璣」、方形陰刻「汝／溫」朱印記あり。〔江戸初〕朱筆にて合豎傍句点、同墨筆にて返点、連合符、音訓送り仮名、欄上行間校注書入。代赭色不審紙あり。

首に単辺方形陽刻「林氏傳家圖書」、毎冊首に同「林氏／藏書」朱印記、毎冊前表紙右肩並に末尾に単辺方形陽刻「昌平坂／學問所」墨印記、毎冊首に双辺同「淺草文庫_書」朱印記、單辺同「書籍／館印」朱印記を存す。

宋璣、字は汝溫、朝鮮全羅北道礪良県（朗山県と合せ礪山とも）の人。朝鮮中宗十五年（一二二〇）に別試及第、官は判尹、兵判に上る。

〔東洋文庫 XI・4・B・10〕

十冊

鹿苑寺 間部詮勝旧藏

後補縹色牡丹唐草文空押艶出表紙（二四・一×一五・五糎）左肩淡茶色艶出題簽を貼布、「詩人玉屑（幾之幾）」と書し、右肩より打付に、同手にて門目を朱書す。改糸、四針眼。黄序、門目を存し本文。第六冊に三卷を収める他は毎冊二卷。卷十六第一張鈔補。卷首匡郭一七・六×一二・一糎。末尾に尹跋、列銜を存す。

卷十五首に単辺方形陽刻「彭城金／永瀨幹／夫氏家藏」朱印記を存す。〔江戸初〕墨返点、連合符、音訓送り仮名、欄上補注、標注書入、又〔江戸前期〕朱合豎傍句点、標傍圈、傍線書入あり。縹色不審紙。第三冊後に副葉を存し、前半に「四月晴和雨乍清／南山當戸轉分明」、卷十四後に旧副葉を存し、同じく「三條陌上拂金羈／萬里橋邊映先旗／此日令人腸欲斷／不堪將入笛中吹」墨書あり。毎冊首に單辺方形陽刻「鹿苑寺」墨印記、同「水山文庫」朱印記（間部詮勝所用）、毎冊尾に同「雲邨文庫」朱印記（和田雲邨所用）を存す。

〔延世大学校中央図書館 八二二・一〇九〕

一冊

存卷五至九 首尾欠

丁子染艷出表紙（二九・二×一七・八糎）左肩打付に「玉屑卷之單」と書す。卷五第一至七張、卷八第二張、卷九第十二張以下欠。卷六首匡郭一八・三×一二・二糎。
朱墨傍点、傍圈書入。

又 後修

以下の伝本では、卷十第一至二張、卷十三第十七張、卷十四第一張、卷十九第十九張等に補刻が認められる。また卷二十末行に存する卷二十一首題の「一」字を欠く。

〈国立公文書館内閣文庫 集一〇九・四〉

五冊

後補栗皮表紙（二六・四×一六・四糎）首冊のみ左肩打付に「一」共五冊」と、毎冊右下方綫外打付に冊数を書す。左肩に題簽を貼布し「詩人玉屑〈幾之幾〉」と書す。首冊のみ右下方に旧藏書票一種を貼附す。一部裏打改裝。黄序、門目を存し本文。第三冊に五卷を収める他は毎冊四卷。卷首匡郭一七・三×一二・一糎。末尾に尹跋、列銜を存す。

稀に墨傍点書入あり。

〈高麗大学校中央図書館 晩松文庫三〇三〉

三冊

存卷八至十 十四至十八 尾欠

丁子染艷出表紙（二四・四×一五・七糎）左肩打付に「玉屑」と書す。書背「三（五、六）」と冊数墨書。卷十八第二十四張以下欠。卷八首匡郭一七・八×一二・〇糎。
墨傍句点、句圈、傍線書入あり。

〈延世大学校中央図書館 貴二八九 八〇八・一〉

二冊

存卷一至三 十四至十五 尾欠

新補黄色正繫文空押艷出表紙（二六・九×一五・九糎）中に丁子染雷文繫蓮華文空押旧表紙、左肩打付に「詩人玉屑〈卷幾之幾〉」と書す。書背に「共七」と書す。黄序を欠き、門目を存し本文。

墨傍点、傍線、欄上補注、藍筆校注、首のみ朱句点書入。首冊前見返しに「雪月堂藏」識語あり。卷十五首に单边方形陽刻「西原／韓氏」朱印記を存す。西原は忠清道清州の別称。

〈延世大学校中央図書館 貴七七四 八二二・一〇九のうち〉

存卷十四至十七 首尾欠 卷一至三配同版後印本

四卷を存す(二冊のうち一冊)。黄檗染雷文繫文空押艶出表紙(二八・四×一七・一糎)左肩打付に「詩人玉屑」、右肩に「詩」と、右下方綫外に「廿一」と書す。卷十四第一至第三張前半、卷十七第二十八張欠。卷十五首匡郭一七・七×二二・〇糎。

剝離した前見返しの背面左肩に外題別筆にて「詩人玉屑」と、右肩より「借欽補歸其惟挾／簡者」行歟／丁卯四月旬一日書墨識、書込「師」印記を存す。傍点、傍線、欄上標校注書入あり。

〈お茶の水図書館成實堂文庫〉

朝鮮元混旧蔵 大正十一年(一九二二) 徳富蘇峰識語

六冊

黄檗染表紙(二七・五×一六・四糎)左肩打付に「詩人玉屑(第幾之幾)」と、右方より小字にて門目、右下方綫外に「承六」と書す。五針眼。黄序、門目を存し本文。奇数冊に各三卷、偶数冊に各四卷を収め、末尾に尹跋、列銜を存す。

每冊首に单边方形陽刻「元混／太初」朱印記あり。また本邦〔近世初〕朱筆にて合堅句点、標圈、門目校注書入、〔江戸初〕朱墨にて返点、連合符、送り仮名、欄外補注書入。縹色不審紙。

毎偶数冊首に单边扇形陽刻「(左)林」朱印記を存す。首冊前見返しに徳富蘇峰筆にて「是書與舊儲所謂五山板對校目次雖同一／各目中数項有増加 大正壬戌九月念七(既欠)」於逗子觀瀾亭(更既格)蘇峯老人」識語あり。每冊首に单边方形陽刻「蘇峰／審定」朱印記(徳富蘇峰所用)を存す。

元混、字は太初。江原道原州の人。燕山君十一年(二五〇五)生、中宗二十年(二五二五)文科及第。官途は判中枢府事に至り、宣祖二十一年(一五八八)歿。蘇峰識語の大正壬戌は十一年(一九二二)。明治末年に島田翰より買い受けた前述の〔南北朝〕刊無跋本と、この本を比べ、本文の増加に注意している点は、やはり炯眼と称すべきであろう。⁽²²⁾

〈延世大学校中央図書館 貴七七四 八二二・一〇九〉 二冊

存卷一至三 尾欠 卷十四至十七配同版早印本

後補素表紙(二八・七×一七・〇糎)左肩打付に「詩人玉屑(卷之一)」と書す。六針眼。黄序、門目(第三張欠)を存し本文。卷三第九張以下欠。

墨傍点、傍圈、断爛部鈔補書入。前見返しに「癸未四月日」識語、首右辺外に別筆にて「主池□□宅冊」識語あり。每冊首尾

に「雪／＼／臧」朱印記を存するも、朱藍滅。

又 通修

〈お茶の水図書館成實堂文庫〉

五冊

祥雲寺旧蔵 明治三十八年（一九〇五）徳富蘇峰識語

後補淡黄檗染雷文繫菱形文空押表紙（二五・八×一五・六糎）

左肩題簽剝落痕、首冊左肩打付に「朝鮮板詩人玉屑」「一」と、

右下方に「共五」と書す。右肩打付に邦人朱墨にて細目標出。

黄序、門目を存し本文。第一冊に五巻を収める他は毎冊四巻。

末尾に尹跋、列銜を存す。

〔江戸初〕朱傍句点、傍句圈、稀に返点、連合符、送り仮名、

欄上標校注、校改、鈔補書入。毎冊首に单边方形陽刻「祥雲／

寺印」墨印記あり。首冊前見返しに「朝鮮板詩人玉屑考証／

明治卅八年十一月初九夕」と上書せる徳富蘇峰自筆の封書を

貼附、版本の考証及び、森大狂と共に祥雲寺を訪れ該本購得の

次第を記し、第四冊尾に「明治三十八年十一月十六日午後十一

時読訖 蘇峰学人」朱識、毎冊首に双边方形陽刻「蘇峰學人／

徳富氏愛／藏圖書記」、同「蘇峰／清賞^{書標}」、同「徳富／所有

（同）」、单边同「天下之公／寶須愛護（同）」朱印記（以上四類、

徳富蘇峰所用）を存す。⁽²⁾

以下の伝本には、巻五第十張、巻六第一、十一至十二、巻七
第一、巻八第五至六、巻九第五、七張等に、さらに補刻がある。

〈お茶の水図書館成實堂文庫〉

二冊

存巻五至九 十五至十八 安鼎福旧蔵 徳富蘇峰識語

〔天理大学附属天理図書館 九二一・〇四・イ三〕

一冊

存巻十九至二十一 同 今西龍旧蔵

丁子染雷文繫蓮華唐文空押艶出表紙（二七・五×一七・二糎）

左肩打付に「詩人玉屑（巻幾／之幾（終）」と、右肩より門目を

書す。成實堂分首冊のみ左辺に「蘇峰」筆にて「安鼎福舊儲」と、

右下方に「共二／珍本」等と朱書す。本文厚手楮紙。同第一冊

に巻五至九を、第二冊に巻十五至十八、天理図書館分に巻十九

至二十一を収める。末尾に尹跋、列銜あり。巻五首匡郭一七・

三×一二・二糎。

〔朝鮮朝〕墨筆にて傍点、標傍圈、欄上行間補注（引「律髓」、

朱句点書入。毎冊首に双边方形陽刻「竹／院」朱印記、单边同

「安印／鼎福」朱印記あり。正中跋欄上に書入同筆にて「按正

中即倭皇後醍醐／嗣名尊治之年号正／中元年甲子當中國／元泰定

元年／疑此書來自日本因／以刻之故倭號因存耳」〔又按此冊印

紙亦倭紙〕墨注を施す。成實堂分每冊首に單辺方形陽刻「蘇

峯」、同每冊尾に同有界「蘇峰學人／京城所獲」朱印記（以

上二顆、徳富蘇峰所用）を存し、同第一冊前見返しに蘇峰自筆「予

元來藏明正統韓板詩人玉屑全部／五冊頃於京城觀此書不顧慮零

本投重／值購還而對照乃知全然同一板也仍／藏于同箇長為參照

之資云尔／（以下低格）大正丙辰霜月十七於成實堂／文庫（隔四格）蘇峯

生〕墨識、同第二冊前見返しに同「是書安鼎福舊儲／須珍重／

朝鮮正統年來刊本／大正庚申十月 猪誌〕朱識を存す。天

理分首尾に單辺方形陽刻「今西龍／所具」、同「今西／春秋／

圖書（書録）〕朱印記あり。

安鼎福、字は百順、順菴と号す。朝鮮肅宗三十八年（一七一

二）生、本貫京畿道広州、忠清道堤川出身の人。挙業を経ない

が学名顕われ、正宗の書筵に侍し任官した。『順菴集』の他に

も著述が多い。正祖十五年（一七九二）歿。蘇峰識語の大正丙

辰は五年（一九一六）、庚申は九年。既に祥雲寺旧蔵の同版本

を手にしていたが、京城に於いて一本を加えたもの。⁽²⁸⁾

〈韓国学中央研究院 D五C・六〉

一冊

存卷五至七

丁子染雷文繫菊花唐草文空押艶出表紙（二四・二×一五・八糎）

左肩打付に「詩人玉屑卷五」と、右肩より門目を書す。背面官

文書。左上方を欠損。前見返しに表紙別筆にて門目を列す。卷

五首匡郭一七・三×一二・二糎。

朱墨傍点書入。後見返しに「主綾齋後人具氏家藏」墨識あり。

首に方形陰刻「歸隱／齋藏」朱印記を存す。

同 闕名點

日本寛永十六年（一六三九）刊（京 田原仁左衛門）

覆朝鮮正統四年（一四三九）跋刊本

後続の明清版の著録と前後するが、日本にはもう一種、上記

の朝鮮版を覆刻した翻版があり、流布本の地位を占めている。

その行款は底本に従うが、行間に附訓を加えた和刻本であり、

版式にも小異がある。

每冊前表紙に双辺刷題簽「詩人玉屑（幾）」を貼附す。黄序

は楷書体、末尾の「玉林」印記摸刻を双辺とする。本文は底本

に従うが、卷十七第十一張版心の張数を「初十一」、次張を「又十一」と刻し、「二十七」に至るも二十八張を存す。返点、連合符、音訓送り仮名附刻。

四周双辺（二〇・二×一二・八種）無界。版心、中黒口（周接内）

双花口魚尾（向対）間題「玉屑卷幾」、張数。卷二十一の末尾に

正中元年（一二三四）の玄恵加點識語を有し、本文後に正統四年（一四三九）の朝鮮尹炯の刊跋と、同時の列銜を附す。但し列銜首の空白と、刻手の各三行を節して大尾に空白を設け、数格を低して「寛永十六年己卯九月吉辰／＼二条鶴屋町田原仁左衛門新刊」刊記あり（図版六）。

本版は、二十一巻を備えて巻尾に玄恵の識語を有つから、いわゆる五山版の第二種、「南北朝」刊有跋本の系統を引くことは明らかであるが、本文及び尹跋と列銜を有つ特色から、同本を覆刻した朝鮮版に依拠する版本と判定される。本版には附訓を伴い、巻尾に玄恵加點の識語を有することから、往々玄恵点本と著録されるが、抑も五山版や朝鮮版に訓点はないから、玄恵と本版の附訓を結び付ける理由はなく、点者の名は不明としなければならない。^⑩

本版卷一の本文を底本に比較すると、基本的には朝鮮刊本の

正誤を踏襲するが、一前七「行有未至可加工力」を「未至」、一後三「博取盛唐名家醞釀胷中」を「醞釀」、二後十「古人未嘗不讀書」を「未嘗」、三前五「一唱三嘆之音」を「旨」、同七「何在其末流」を「未流」、同後六「聲聞辟支之果」を「辟支」、四後二左「潼関」を「潼関」、同「王維韋應物輩」を「王維」、同三右「蕭散之趣」を「蕭散」、同左「如今日之細碎卑冗無餘味也」を「細碎卑冗」、五後十「自臨釣石及深清」、六前一「釣石非尋常之石」を共に「釣石」、十二後五「看詩當具金剛眼睛」「禪家有金剛眼睛之說」を共に「眼睛」と誤り、以下出現の箇所を略するが、「爲」「觀」「胷」「淺」「深」「參」「眞」「蘇」「清」「歡」「養」「錢」「兒」「觀」「學」字を殆ど略体或いは異体字とし、疊語の下字を「々」号とする一方、間々「隱」字を正体とする相異がある。総じて意図的に底本を改めることは殆どないが、字体の相似に伴う譌誤と、字体の変更が相当に多い。後者は本邦の慣習に従つたと見られるものの、異同の多くは坊刻の不備とするを免れない。

以下、本版伝本の著録は機に応じて行つたのみ、十分調査を尽していないが、暫時下記の下四段階に分けられる。ただ、それぞれの内部では印刷の先後を定め難いため、稿著者著録の順に列

することを諒とされたい。なお本文前の黄序、門目と、本文後の尹跋、列銜については、有無と順序に殆ど異同がないため、特に変動がない限り、綴合の様子を記さなかった。

〈天理大学附属天理図書館 古二〇三・八〉 三冊

後補淡缥色雷文繫蓮華唐草文空押艶出表紙(二六・八×一七・六糎) 左肩黄檗染題簽を貼布し「詩人玉屑(幾至幾)」と、右肩より打付に門目を書す。第一冊に六卷、第二冊に七卷、第三冊に八巻を収める。

朱合傍点、傍圈、校注、校改、附訓改正、朱墨欄上補注、藍筆傍点あり、仁斎以下、古義堂主歴世の書入か。

〈久留米市立中央図書館 漢(和)集・二二六〉 五冊

樺島石梁旧蔵

新補洪引刷目包背表紙(二六・二×一七・一糎) 左肩打付に題目等ペン書き、右肩に樺島文庫原蔵、樺島石梁蔵書票を貼附す。次で墨染表紙、左肩刷題簽を貼附、題下に巻数墨書、右肩打付に「十二函」と朱書す。第一冊に五巻を収める他は毎冊四巻。毎冊首に単辺方形陽刻「久留米／北樺氏／尚友舍」朱印記あり。

〈柳川古文書館伝習館文庫 安一八八〉 五冊

安東(問斎)(守官)等批点書入

新補深緑色表紙(二四・九×一四・四糎)。改糸、「天地截断」。第三冊を五巻とする他は毎冊四巻。

朱標豎傍句点、標傍句圈、曲截、校改、附訓改正、張数、同墨標圈、欄上校補注書入あり。缥色不審紙、附箋。卷七第二張後半第六至七行欄上に「海棠詩絶無／風致絶妙安東」、卷八第十五張後半第一行の欄上に「守官点〇〇〇」とあり。毎冊首並に巻中に単辺方形陽刻「傳習館／郷土文／庫之印」朱印記を存す。

〈台北・国家図書館 一四七五〇〉 十冊

新補藍色表紙(二八・〇×一七・六糎)。五針眼、改糸。虫損修補。前副葉宣紙。第五冊に三巻を収める他は毎冊二巻。

問、「江戸初」朱傍句点、傍圈、朱墨欄上補注書入。

〈台北・国家図書館 一四七五一〉 三冊

清張乃熊旧蔵

後補丹朶繫文空押艶出表紙(二四・四×一六・九糎) 中央打付に「文靖堂／幾」と書す。左肩題簽剝落痕、打付に別筆にて「詩

人玉屑（上（中下））と書す。書背に「共三」と書す。天地裁断。本文薄手楮紙。見返し、前後副葉後補。第二冊に九巻を収める他は毎冊六巻。巻八第五張、巻十五第五張、巻十七第二十四張鈔補。

鈔補同筆にて朱豎傍句点、標傍圈、行間校補注、欄上校改書入あり。縹色不審紙。第三冊前見返しに「文靖堂」墨書、後表紙に「三吉野ハ山も／霞て有明の」等書込み。目首に单边方形陽刻「苙圃／所臧」（張乃熊所用）朱印記を存す。

〈神戸大学附属図書館小林文庫　〇九八・五・G〉　五冊

淡墨染雷文繫桐花唐草文空押艶出表紙（二七・三×二六・八糎）左肩刷題簽を貼附。毎冊左下方打付に「利」と書す。五針眼、改糸。虫損修補。第三冊に五巻を収める他は毎冊四巻。早印。

〔江戸前期〕朱豎傍句点、傍線、標韻圈、稀に附訓改正、同朱墨欄外行間校注書入あり。第五冊巻十八首題下に双边円形陽刻「祖／昶」墨印記、毎冊首に方形不明、单边方形陽刻「淨／巔」朱印記、巻首並に第二以下毎冊首に同「中邨／圖書」朱印記、毎冊首に单边竹根形陽刻「小林太市郎／教授旧臧」朱印記を存す。

〈神戸市立中央図書館吉川文庫　集Ⅳ・三・二七〉　十冊

縹色艶出表紙（二六・一×一六・八糎）左肩刷題簽を貼附。五針眼。毎冊後表紙左肩に香色亀甲形小簽を貼布し「四十七詩」と書す。第十冊を三巻とする他は毎冊二巻。

間々近世期の朱句点、磨滅部鈔補書入。茶色不審紙。毎冊首に单边方形陽刻「東圃／堂圖／書」朱印記、同「松平氏／藏書印」朱印記、首に「吉川／幸／次郎」朱印記を存す。

〈陽明文庫　シ・五七〉　十冊

後補淡渋引漉目艶出表紙（二八・二×一九・六糎）左肩打付に〔近衛家熙〕筆にて「詩人玉屑（幾幾）（書行）」と書す。押し八双あり。前後副葉後補。第五冊を三巻とする他は毎冊二巻。巻二十一第四至五張欠。早印。

〈尊経閣文庫〉　十冊

金沢学校旧蔵

縹色漉目艶出表紙（二六・七×一七・四糎）左肩に同工別版の刷題簽「詩人玉屑」を貼附す。首冊右肩に旧藏書票剝離痕。五針眼、改糸。第六冊を三巻とする他は毎冊二巻。

朱豎句点、墨附訓増補、朱墨行間欄上補注（片仮名交り）書入あり。縹色不審紙。目首に単辺円形陽刻「今／枝／氏」朱印記、首冊前見返しに小簽を貼布し単辺方形陽刻「明治壬子採／收三宅舊藏」朱印記、毎冊首に単辺円形陽刻「學」朱印記（金沢学校所用）を存す。明治壬子は四十五年（一九一二）。

〈慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 ホ九二〇・五〉 合三冊
古城坦堂旧蔵 細川家永青文庫寄託

新補藍色表紙（二五・七×一五・二）二種、第二冊の前後は更に改む。五針眼、改糸。第一、三冊後見返し、白宣紙に「丙子夏日／白石居士／翰墨緣摹古」等五言四句、礼器図黄緑套印紙箋。第一冊に八卷、第二冊に七卷、第三冊に六卷を収む。
朱豎句点、欄上校改、稀に合点、括弧、行間補注、訓点増補書入あり。毎冊前見返しに単辺円形陽刻「清／賢」墨印記、毎冊首に同方形「□堂藏書」朱印記を存す。

〈慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 D四・ト七一〉 十冊
淡茶色艶出表紙（二七・三×一八・三）一種 左肩に刷題簽を貼附。中央打付に「宿」と白書。第六冊に三卷を収める他は毎冊二卷。

極稀に朱傍線書入あり。淡茶色或いは縹色不審紙を附す。

〈慶應義塾図書館 中文・奥野・I三・二九〇〉 合五冊

後補洪引漉目艶出表紙（二五・四×一六・〇）一種 左肩刷題簽を貼附、墨書し冊数を卷数に改む。天地截断。見返し新補。第三、五冊に四卷、第四冊に三卷を収める他、毎冊五卷。

稀に朱標鈎、豎点書入。卷一、三、五、八、十、十二、十四、十六、十八、二十首に単辺方形陽刻「泰堂／藏書」朱印記、同二層「〔鏡／流／亭〕・〔松尾氏／藏書印〕^{（書楷）}」朱印記、単辺円形陽刻「詩^{（書楷）}」朱印記を存す。

〈慶應義塾図書館 七〇・三二〉 十冊

新井由三郎旧蔵

縹色艶出表紙（二六・四×一七・五）一種 左肩刷題簽を貼附。首冊のみ題簽右下打付に「共十卷」と書す。五針眼、改糸。虫損修補。第三冊に三卷を収める他は毎冊二卷。卷十八第二十二、二十一張錯綴。

朱合豎傍句点、傍句圈、稀に行間校注、欄上標注書入、ペン書き標注あり。毎冊首に単辺方形陽刻不明（末行「亭圖書^{（書楷）}」）

朱印記、同不明墨印記刪去、单边方形陽刻「郷古氏／圖書印」朱印記、同「故新井由三郎遺／書□藏之章」朱印記を存す。

〈鶴見大学図書館 九二・〇四・S〉

渡辺千秋旧蔵

合五冊

縹色襷縞文空押漉目艶出表紙（二八・二×一八・六糎）左肩刷題簽を貼附、但し殆ど剝落し、打付に「詩人玉屑 〈幾幾〉」と書す。首冊のみ中央打付に「崑」「」と白書。每冊右肩に

藍印墨書旧蔵書票を貼附。書口墨書每冊二段、第十に至る。本文礬砂引楮紙。第三冊に五卷を収める他は每冊四卷。早印。

極稀に欄上墨補注書入。卷一、三、五、七、九、十一、十四、十六、十八、二十首に单边方形陽刻「（様）妙興藏書密鉞置焉」墨印記、每冊首に同「楓閣／圖書」、卷首並に第二以下每冊首に「渡邊千秋藏書（書行）」朱印記（以上二類、渡辺千秋所用）を存す。首に東方文化研究所漢籍目録を引載する朱書紙箋、巻中にも同様の紙箋を差夾む。

〈西尾市右瀬文庫 九八・一〉

十冊

縹色艶出表紙（二八・四×一八・七糎）左肩刷題簽を貼附、或

いは剝落痕打付に「詩人玉屑 〈幾〉」と書す。五針眼、改糸。第六冊に三卷を収める他は每冊二卷。早印。

〔江戸前期〕朱豎傍句点、傍圈、稀に返点、送り仮名、行間校注、欄上校改書入あり。大尾左辺外下方に「寛文四／廿」細書。卷首に方形陰刻「鈴木／勝印」、第二以下每冊首に单边方形陽刻「鈴木」小朱印記、卷首並に第二以下每冊首に同「定軒／藏書（書草）」朱印記、每冊首尾に双辺同「渡邊藏」朱印記、每冊尾に单边同「夢／幻」朱印記を存す。

〈国立公文書館内閣文庫 三六三・八七〉

合五冊

縹色艶出表紙（二七・〇×一六・五糎）左肩に同工別版「詩人玉屑」刷題簽を貼附し、題下に卷数墨書（第三冊は「五」、第四冊「七」を、第五冊「九」を改む）。首冊のみ右下方に双辺刷粹小簽を貼布し「文史」「」と朱書す。第三冊に五卷を収める他は每冊四卷。

卷十八のみ朱句点、句圈書入。淡縹色、素紙附箋。代赭色不審紙。每冊尾に陽刻「天保乙未」朱印記、每冊前表紙右肩並に每冊尾に单边方形陽刻「昌平坂／學問所」墨印記、每冊首に双辺同「淺草文庫（書櫓）」朱印記、单边同「書籍／館印」朱印記を存す。

〈国立公文書館内閣文庫 別三五・二〉

五冊

林家旧蔵 明暦四年（一六五八）林梅洞校点書入

後補淡渋引表紙（二七・二×一六・五糎）左肩題簽剝落痕、打付に「詩人玉屑（幾之幾） 幾」と書す。首冊のみ右下方に双辺刷粹小簽を貼布し「文史十七」と墨書す。その左傍に小簽を新補し「〔假特〕三五号（五）」と書す。中央に旧蔵書票一種貼附。第三冊に五巻を収める他は毎冊四巻。尹跋、列銜を欠く。

朱傍豎句点、同墨欄上校改書入。縹色不審紙。卷二、四、六、八尾に「春信滴露」、卷十二、十七尾に「春信朱之」、大尾に「戊戌仲春 春信一見了」朱識記あり。毎巻首題下に方形陰刻「梅／洞」朱印記、毎冊首に単辺方形陽刻「林氏／藏書」朱印記、毎冊前表紙右肩並に末尾に同「昌平坂／學問所」墨印記、毎冊首に双辺同「淺草文庫^{（書格）}」朱印記を存す。

識語の春信は、印記の梅洞の名。梅洞生存中の戊戌は明暦四年に当たり、その十六歳時の加点である。

〈宮内庁書陵部 國・二三九〉

十冊

国分青庄旧蔵

後補淡茶色己繁花卉文空押艷出表紙（二七・三×一七・四糎）

左肩双辺刷粹題簽を貼布し「詩人玉屑 幾」と書す。五針眼、改糸。包角剝落痕あり。第五冊に三巻を収める他は毎冊二巻。極早印。

朱豎傍句点、本文校改、附訓改正、欄上補注書入、墨欄上補注書入あり。縹色、淡紅不審紙。毎冊首に単辺方形陽刻「^{（彩山）}山岸藏書」朱印記を存す。

〈宮内庁書陵部 一五九・一二〇〉

二冊

後補茶色澁目艷出表紙（二七・一×一九・二糎）左肩打付に「詩人玉屑首尾」^{（二）}と書す。右肩より別筆にて門目を列す。首冊のみ中央に朱欄鉛印蔵書票を貼附す。五針眼、改糸。本文薄紙。首冊に十一巻、尾冊に十巻を収む。早印。首のみ朱豎傍点書入あり。縹色不審紙。

又 後印（^{（二）}京）角屋清左衛門

同版本中に原刊記の「二条鶴屋町田原仁」の文字を挖去し「角屋清」と改刻した後印本がある（図版六一五）。

なお刊記第一行の寛永十六年（一六三九）九月刊記は元のま

まとするが、角屋清左衛門は、天和二年（一六八二）の刊記を有する『標題餘狀元補注蒙求』や、元禄十五年（一七〇二）の跋を有する『勅諭国英法鑑禪師太倫和尚語録』を印行した書肆であり、当該本も少しく後、江戸前期の印行と目される。³²⁾

〈慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 九二〇・ト七〉 五冊

淡縹色卍繫菊花唐草文空押艶出表紙（二七・二×一八・〇糎）左肩に刷題簽を貼附す。改糸。本文薄手楮打紙。第三冊に五巻を収める他は毎冊四巻。

卷三に朱行間校改、欄上校注書入あり。淡紅或いは茶色不審紙。毎冊首に单边方形陽刻「堀木／文庫」朱印記を存す。

又 後修

この種の伝本には卷二十四張前半第十行より同後半第七行までの本文を改刻した後修本がある。改刻部も同文、但し後半張第四行首「大史」、第五行首「近時」二字間にそれぞれ連合符が附刻されていたものを、改刻後には失っている。

〈宮内庁書陵部 一五九・一八四〉 十冊

茶色漉目艶出表紙（二六・九×一七・一糎）左肩に同版刷題簽を貼附す。首冊のみ右肩に朱欄鉛印蔵書票を貼附。押し八双あり。改糸。第六冊に三巻を収める他は毎冊二巻。卷六第五、四張錯綴。卷首匡郭二〇・〇×一二・八糎。

又 正徳二年（一七一二）印（京）瀬尾源兵衛等

やはり同版で、寛永十六年の刊記二行を全て挖去し、比較的小字を以て「正徳二年辛卯首夏／（^{格紙}）」（川勝五郎右衛門／瀬尾源兵衛）蔵版」と改刻した後印本がある（図版六一六）。³³⁾

〈県立長野図書館 九二一・九二〉 十冊

淡茶色漉目艶出表紙（二六・五×一七・三糎）左肩刷題簽を貼附、首冊のみ剝離痕に題簽を後補し「詩人玉屑（幾）」と書す。第六冊に三巻を収める他は毎冊二巻。卷首匡郭二〇・一×一二・八糎。

首のみ朱傍句点、傍圈、磨滅部鈔補、行間校注、欄上朱墨批補注書入あり。桃色不審紙。目首に方形陰刻「消山／吟樵」朱印

記、毎冊首に单边方形陽刻「精勤堂／圖書記」朱印記、首に同「須田まさ／寄贈之章」「信濃／圖書／館印」朱印記を存す。

篠崎小竹旧蔵

墨染雷文繫桐花唐草文空押艶出表紙（二七・一×一七・二浬）

左肩刷題簽を貼附。改糸。末張の後半に文字のない巻では後見返しを欠き、本紙を後表紙に貼附す。第五冊に三巻を収める他は毎冊二巻。

〔東北大学附属図書館 教九二一・五七〕 十冊
縹色布目菱形繫文空押艶出表紙（二六・三×一七・〇浬）左肩刷題簽を僅かに存し、題簽を新補して「詩人玉屑 幾」と書す。第九冊に三巻を収める他は毎冊二巻。

朱豎傍点、標鈎書入、新筆豎傍点、標傍圈書入あり。毎冊首に单边円形陽刻「通」朱印記、毎冊前見返しに同方形「第二高／等學／校圖書」朱印記を存す。

○〔元〕刊本系統

極稀に朱傍点書入あり。毎冊首に单边楕円形陽刻「小竹齋」朱印記（篠崎小竹所用）、同方形「吉田氏／圖書印」朱印記、同「帝室／圖書／之章」朱印記を存す。

〈家蔵〉

十冊

縹色布目雷文繫菊花文空押艶出表紙（二七・〇×一七・二浬）

左肩刷題簽を貼附、首冊のみ剝落し、題簽を新補して「詩人玉屑 一二」と書す。第五冊に三巻を収める他は毎冊二巻。

朱豎句点、句圈、曲截、胡粉に重書し附訓改正、欄上同朱墨校注（首のみ）書入あり。

〈宮内庁書陵部 五五六・一四九〉

十冊

日本や朝鮮での版行に対し、中国では明初以来、本書の翻刊は乏しかったようであるが、明代後葉に再び版刻が重なり、款式を改めた新校本を産んで、清初に至っている。
これらの版本は、宋元版や五山版以下に述べた前述の諸本に比べ、必ずしも完全とは言えないが、広く大陸での流布本を形成し、次第に朝鮮半島と日本列島にも波及した。そこで次に、知り得た限り、明清刊行の諸版を掲げたい。

同 二十卷

〔明〕刊 黒口 補刻本 翻〔元〕刊本

本書の版刻は明初に一頓挫を来したが、明中期にまた版心黒口の一版が知られ、前掲の〔元〕刊本を引継ぎつつ、新たな欠佚と増補が重なっていく様子が認められる。知見の一本に従い、以下にその概要を述べたい。

黄序（四張）は底本に従うが、門目は知見本に欠く。卷首編題の天地に横界を附す他、体式は宋元版に同じ。毎巻の張数は基本的に底本〔元〕刊本に同じ、但し増修と思われる箇所がある。卷十六以下は底本の知見本に不全でもあるため、全巻について次に表示する。

卷之一（一二張）詩辨 至 詩法

卷之二（二八張）詩評 至 詩體

卷之三（一至「二十三之二十五」至二十八張）

句法 至 本朝警句

卷之四（一至「九之十一」至十八張）

風騷句法 至 詩有四鍊

卷之五（一二張）口訣 至 初學蹊徑

卷之六（一九張）命意 至 下字

卷之七（二四張）用事 至 屬對

卷之八（二一張）煅煉 至 點化

卷之九（二三張）托物 至 白戰

卷之十（一至十六、「十五之十七」至二十二張）

含蓄 至 知音

卷之十一（一至「前四」「後四」「前五」、五至十二張）

詩病 至 考證

卷之十二（一至五、「後五」「前六」、六至七、「後七」

「前八」、八至十三張）

品藻古今人物 至 絕句

卷之十三（一九張）三百篇 至 靖節

卷之十四（二三張）草堂 謫仙 李杜

卷之十五（二五張）王維 至 常建

卷之十六（一九張）香山 至 晚唐

卷之十七（二八張）西崑體 至 雪堂

卷之十八（二五張）涪翁 至 王仲至

卷之十九（二四張）中興諸賢

卷之二十（一至六、「後六」至三十二張）

四周双辺（一八・八×二・三種）、〔元〕刊本と款式を等しくするものの、字様を一新した翻刻本に当たる。版心、粗黒口（（接内）三線黒魚尾（（下二尾））、上尾圈発下に「玉屑卷幾」と、下二尾間に張数を刻す。卷十四尾題下に「李補刻故居後」記あり。

本版卷一の本文を〔元〕刊本に比べると、一後二「以李杜二習枕藉觀之」を「二集」、二前五「學漢魏晉與盛唐詩者臨濟下也」を「臨齊」、二後十「詩有別材非閨書也詩有別趣非閨理也」を「關書」「關理」、四後三左「細碎卑冗無餘味」を「卑沈」、五前十一「字字皆皆奇」を「皆奇古」、六前十一「學竟無方作無路」を「無略」、七前二「鷗鷺溪鵲莫漫喜」を「鷗鷺」、「鑒」「體」「清」「青」を略体に作る一方、「禪」を正体につづっている。

本版の本文は、卷三、四、十に「幾之幾」の張付を交えて欠張を糊塗する等、〔元〕刊本の故障をそのまま引継いでいる上、九—十三後三「人■湖」、十—十八前八「時■章」、十一—十九後二「■世」、十二—「後五」前六「氏■宮」、同後六「有■■紆」、十三—十三後五「騷■無」、十四—四前十一「人口■」等の他、卷十三第一張前半の第六至七行には六字格に及ぶ墨釘がある等、重版によって故障を加えた点が指摘される。ただ、後

出の明清版に比較した場合、宋元版や五山版、朝鮮版のように、卷十二から十四の間も、本文を完備している点が異なっている。しかしこれも、当該巻の張付に注目すると、「前幾」「後幾」等の不自然な文字を加えたことが注意され、字様の若干異なる箇所も散見される。

これは例えば、卷十四について見ると、末尾の「補刻」記に拠れば、「李」即ち李白に関する「謫仙」「李杜」の二門は補刻であり、杜甫「草堂」門の後に置かれたと解され、原刻本には「草堂」第一至十四張のみであったのに、第十五以下の張子を補刻したことになる。実は卷十四を「草堂」一四張のみとするのは、後出の明清版の特色であつて、本版の底本も既に同様であつたものを、別本に拠り補刻したのであらう。現在遺存する〔元〕刊本を見ると、北京大学蔵本はやはり卷十四の首を欠いて「草堂」から始まっている。首題は欠くから、当初は別に巻首を存したのであらうが、やはり〔元〕刊本の故障が後世に影響したと見ることができる。

そう考えると、他にも卷十一の第三至四張を欠いて、第二張を「二之四」とするのは、〔元〕刊本以来の欠失で、明清版にも引継がれていったものを、本版では張付を「前四」「後四」

等と変更または増益し、「詩病」門「狂怪」章の途中から、「金山詩」「櫻桃詩」「水仙詩」「竹詩」「中秋詩」「孤雁詩」の各章と「雪詩蛙詩」章の途中までを補ったと想像される。

但し原刻本の伝存を見ない現状では、卷十四末の他は、どの箇所が補刻と明示することが難しい。本稿では一応、元版の欠失を引継ぎ、後掲明清版と同様の欠失に進んだ原刻本に対し、卷十四等の補刻によって、幾分か原態を回復した本文と見て置きたい。

もう一点、本版の卷二十には、「宋末元初」刊本系統の原本に比較すると、重要な異同がある。本版の卷二十は、諸版に同じく「禪林」「方外」「閨秀」「靈異」「詩餘」の五門からなる。このうち後四門は、款式や文字の僅かな異同はあるものの、原本と大同である。しかし初めの「禪林」門には、原本に比べ計五章、二十七行を増しており「仲殊」編の「遺珠」と「復齋謾録」に拠る二章、「惠洪」編の「許彦周詩話」に拠る一章、不明の一章と「福州僧」章は増補に当たる。またその内容は、前出の「南北朝」刊有跋本に近似する。次に同版と本版の「禪林」門の章目、出典と行数を対照したい。上段は「南北朝」刊有跋本、後段は本版とする。

酸餡氣〈石林詩話〉	10	酸餡氣〈石林詩話〉	10
無蔬筍氣〈西清詩話〉	9	無蔬筍氣〈西清詩話〉	9
靈徹〈雪浪齋日記〉	4	靈徹〈雪浪齋日記〉	4
—〈集古錄〉	3	—〈集古錄〉	3
船子和尚〈冷齋夜話〉	6	船子和尚〈冷齋夜話〉	6
道潜〈冷齋夜話〉	19	道潜〈冷齋夜話〉	19
—〈高齋詩話〉	3	—〈高齋詩話〉	3
仲殊〈遺珠〉	7	仲殊〈遺珠〉	7
—〈雪齋廣錄〉	2	—〈雲齋廣錄〉	2
—〈復齋謾録〉	9	—〈復齋謾録〉	8
惠洪〈遺珠〉	6	惠洪〈遺珠〉	6
—〈許彦周詩話〉	7	—〈許彦周詩話〉	6
—〈雪浪齋日記〉	13	—	3
—〈冷齋夜話〉	11	—〈雪浪齋日記〉	3
—〈冷齋夜話〉	9	—〈冷齋夜話〉	3
(後出)		福州僧〈古今詩話〉	4
惠詮〈冷齋夜話〉	10	惠詮〈冷齋夜話〉	9
清順〈冷齋夜話〉	7	清順〈冷齋夜話〉	7
—〈冷齋夜話〉	8		

癡可〈西清詩話〉	5	癡可〈西清詩話〉	5
—	—	—	—
〈漁隱〉	4	〈漁隱〉	4
—	—	—	—
〈柳溪近錄〉	3	〈柳溪近錄〉	3
顯忠〈洪駒父詩話〉	4	顯忠〈洪駒父詩話〉	4
慶老〈詩說雋永〉	3		
悟清〈復齋謾錄〉	4	悟清〈復齋謾錄〉	4
希畫〈塵史〉	5	希畫	5
景淳	5		
福州僧〈古今詩話〉	5	（前出）	
病僧〈庾溪詩話〉	5	（後出）	
志南〈柳溪近錄〉	6	志南〈柳溪近錄〉	6
圓悟〈柳溪近錄〉	3	圓悟〈柳溪近錄〉	3
（前出）		病僧〈唐溪詩話〉	5

両者を比較すると、本版は「清順」編中『冷齋夜話』を引く一章と、「慶老」「景淳」各一章を欠き、その他、「福州僧」章を「惠洪」章の次に、「病僧」章を最末に置く相異がある。また「惠洪」は、共に計五章から成るものの、後者の記事には数行の不足がある。これらの相異について、原本を参考すると、本版の「惠洪」

の不足と「慶老」「景淳」章の欠、末尾の「志南」「圓悟」「病僧」の排列は、原本に同じである。つまり、本版は原本の形を基に、「南北朝」刊有跋本の基づける増補本に拠り、別途に記事を補ったのであり、編末の餘白と「後六」一張を以って、これを収めたのである。そう考えると、卷十四以外の箇所でも、張数の操作は、後の補刻に伴うものと想像され、原本系統の不足本を底本とすることが想定されよう。

一方、卷二十における増補は、日本の「南北朝」刊有跋本そのものに拠る可能性を完全に否定することはできないが、同本を覆刻した朝鮮版のように、直接の継承関係を裏付ける徴証は認められないから、やはり、有跋本卷二十以下と同様の内容をもつ元乃至明初刊行の増補本が嘗て存在し、該本との校勘に依り本版の補刻が行われた、と見るのが穩当のようである。また逆に、この「明」刊黒口本以下の存在によって、「南北朝」刊有跋本の増補が、全て日本における増編の結果と見ることは、できないものと推知される。

〈上海圖書館 七九三五八—九五〉

八冊

白棉紙印 清汪啓淑旧藏

新補淡藍絹表紙（二九・一×一七・五糎）。金鑲玉裝、原紙高約二五・七糎。本文白棉紙。見返し並に副葉（前後各二枚）宣紙。首に黃序を存し本文。第一、三、六、七冊に各二卷、その他は毎冊に三卷を収める。卷二十第二十一張欠。

稀に〔清前期〕朱傍点、傍句圈、鈔補、欄上批注書入、別朱傍句点、同朱墨行間校改、同墨欄上批注書入あり。卷首題下に「宋菊庄魏慶之醇甫撰」と書す。卷首並に第三、五、七冊首に每字单边方形陽刻「應禎」、方形陰刻「瞻古／思齋」「讀書／體道／儒史」朱印記、卷首に单边方形陽刻「新安／汪氏」、方形陰刻「啓淑／信印」朱印記を存す。

汪啓淑、字は秀峰、詡庵と号す。安徽歙県の人。雍正六年（一七二八）生、没年未詳。

同 十卷

〔明〕刊

明代にはまた、不完全の十卷本も行われた。これは本書の後半部分だけをすっかり失った形で、前半十卷のみで行われたものである。明清にそれぞれ一版を徴することができた。

先ず黃昇序（四張）、（上略）淳祐甲／辰長至日玉林黃昇叔暘序（書格）、印記を欠く。五行十二字。

卷首題「詩人玉屑卷之一／詩辨（大字跨行）（第二）／（格四）滄浪謂當學古人之詩」、体式同前。分卷は宋元版以下に均しいが、卷一至二間の張数を一通とする点は、諸版に異なっている。以下に毎卷の張数のみを注記する。

卷之一（一至十二張）

卷之二（十三至四十張）

卷之三（一至「二十三之二十五」至二十八張）

卷之四（一至「九之十一」至十八張）

卷之五（存一至三張）

卷之六（一九張）

卷之七（二四張）

卷之八（二一張）

卷之九（二三張）

卷之十（一至「二十二」張）

四周双辺（一九・三×一二・四糎）有界、每半張十一行、行二十一字、写刻体。版心、中黒口（接内）、双線黒魚尾（同対）問題「玉屑卷之幾」、張数。尾題同首。

本版の本文にも墨釘が多く、一三前「跡」／、同後十「後／漢」／、一一四前「語」／、同後十「論」／、一一七前一至二「莫」／、一一十後八「悟」／、同十一「着」以下、天地の辺欄に接する文字に故障が多い。これは印刷の粗雑な底本を用いたことに原因しようが、前掲諸版との関係は認められない。その他、印面荒蕪の観を免れない。後出の中国国家図書館蔵本に卷十一以下を欠くが、同蔵の「清」刊十卷本を存するため、元来卷十に止まるものと判ぜられる。但し版心張数の標記など細かな点に涉って、前記「元」刊本の系統に拠ることが明らかである。

〈北京・中国国家図書館 六五二三〉

二冊

尾欠 白紙印 明項元汴旧蔵

新補藍色表紙（二六・八×一五・五糎）、右上方綫外打付に冊数朱書。本文白紙、裏打改裝。見返し、副葉宣紙。黃序を存し本文。每冊五卷。卷五第四至十二張、卷七第七至八張鈔補。卷十尾欠。

墨句点、句圈、欄上行間批注、朱句点、傍句圈、傍線、欄外校注書入あり。卷首に方形陰刻「墨林／山人」、单边方形陽刻「項

元／汴印」朱印記、第二冊首に方形陰刻「吏名／曰談」、同不
明朱印記を存す。

項元汴、字は子京、墨林と号す。浙江秀水の人。明嘉靖四年（一五二五）生、万曆十八年（一五九〇）歿。

同

明嘉靖六年（一五二七）序刊

本版もやはり「元」刊本の系統に基づき、「元」刊本や「明」刊黒口の原本に同じく、卷十二から十四の間に著しい脱簡がある。本版の序に拠れば、明前期に『玉屑』の版刻は振るわず、十分の流布を得なかつた由、そこで江西洪都潜仙氏の翻刻を図つたものが、本版に当たる。ただその本文に不足のある点は、やはり明初の不振に原因するであらう。

先ず潜仙序（三張）、首題「重刻詩人玉屑序／（中略）往年嘗散失後之十卷而刻於湖／南者亦止前十卷天順間江右僉憲宋／宗魯蒐訪而全刻之未幾板罹於災／予近屬知詩者校閱一過剔訛補遺／乃重刻焉（中略）／嘉靖六年丁亥冬十有二月八日／洪都玉峯潜仙識（書行）」直下に单边方形陽刻「玉峰／樓印」印記摸刻並に墨

釘二顆。無界、六行、行字数不等。

文中に見える江右僉憲の宋宗魯と、序者潛仙については未詳。

後者は姓氏に当たるかどうかも不明であるが、洪都は南昌の異称であるから、やはり江西の人であろう。

次で黄序（四張）、門目を欠いて本文に入る。体式同前、但し卷首編題の天地に横界を施す。本版各卷の構成と張数は、基本的に〔明〕刊黒口本の原刻部分に同じであるが、該版では補刻を弁じ難い箇所もあるので、改めて次に掲げる。

卷之一（一二張）詩辨 至 詩法

卷之二（二八張）詩評 至 詩體

卷之三（一至「二十三之二十五」至二十八張）

句法 至 本朝警句

卷之四（一至「九之十一」至十八張）

風騷句法 至 詩有四鍊

卷之五（一二張）口訣 至 初學蹊徑

卷之六（一九張）命意 至 下字

卷之七（二四張）用事 至 屬對

卷之八（二一張）煅煉 至 點化

卷之九（二三張）托物 至 白戰

卷之十（一至「十五之十七」至二十二張）

含蓄 至（知音）

卷之十一（一二張）詩病 至 考證

卷之十二（一〇張）品藻古今人物

卷之十三（一二張）兩漢 至 靖節

卷之十四（一四張）草堂

卷之十五（二五張）王維 至 常建

卷之十六（一九張）香山 至 晚唐

卷之十七（二八張）西崑體 至 雪堂

卷之十八（二五張）涪翁 至 王仲至

卷之十九（二四張）中興諸賢

卷之二十（二三張）禪林 方外 閨秀 靈異 詩餘

单边（一九・六×一三・一糧）有界、款式は同前であるが、字様は写刻体。版心、線黒口、双白魚尾（向対）問題「玉屑卷之幾」、張数。尾題「詩人玉屑卷之幾（終）」。卷十尾題下边に「（奉新翟忠等刊）」記、大尾左边より一行を隔し「瑞昌府章涯（右山）龍沙識（楷書）語あり（図版七）」。

奉新は江西南昌の西にある城市、翟忠は工匠の名であろう。瑞昌府も同じく江西北部の街で、九江の西に位置する。章涯は

未詳、右山龍沙は刊行に関与した者であるうが、やはり詳細不明。序や工匠名等の符合から、江西の版刻と認められる。

本版の本文は、基本的に「元」刊本の系統を汲むが、序にある天順間江西全刻本等を経由した可能性がある。そして「元」刊本に比較すると、卷十二後半の「古詩」「律詩」「絶句」門より、卷十三前半の「三百篇」「楚詞」門までと、卷十四前半の「謫仙」「李杜」門を全く欠いている。これらは、前記の「明」刊黒口の原刻本にも同様であったかと推定される。これらの箇所に含まれ、中国詩の主要な形式と作品、作者を扱った部分を佚することは、重大な欠点と言わなければならない。一方、卷二十の本文中「禪林」「閨秀」「詩餘」門に、「明」刊黒口本と同じ増補が認められ、両者が同系統であることを証している。

以下に述べる明代刊行の四版は、いずれもこの欠佚を継承している上、本版を直接の淵源として、最も広く流布した「清」刊二十卷本が産み出されており、この嘉靖刊本は、本書の版本史上に枢要の位置を占めたと見なされる。

本版の本文中には墨釘が目に付き、十一―十八前八「時■章」、十一―十九後二「■世」、十四―四前十一「人口■」等、前掲「明」刊黒口本と共有の箇所もある。そこで本版が同本に基づく可能

性も考慮されるが、卷十三第一張前半第六至七行等、継承しない箇所も多い一方、卷十三第三張前後の上辺や、同第十一張前半の下辺他、本版で新たに故障となった箇所が多くあつて、挙例に暇ない程であり、この点から両者に直接の関係を認めることは困難である。また本版底本の刊行を天順年間と見る限り、版式字樣等の条件から前出の両種明版をこれに宛てることは、些か躊躇される。

本版卷一の本文を「元」刊本に比べて見ると、一後二「以李杜二習枕藉觀之」を「二集」、二前五「學漢魏晉與盛唐詩者臨濟下也」を「臨齊」、二後十「詩有別材非閨書也詩有別趣非閨理也」を「關書」「關理」、同十一「不落言鑒」を「言筌」、四後三左「細碎卑冗無餘味」を「卑沈」、五前十一「字字皆皆奇」を「皆奇古」、六前十一「學竟無方作無路」を「無略」、六後三「贛川曾文清公」を「贛州」、七前二「鸛鵲溪鵬莫漫喜」を「鵬鵬」、十後八「要自悟」を「悟■」、同十「貴涵養也」を「貴涵養」、十二前九「最忌趁貼」を「襯貼」に作る他、「體」「屬」「纔」「清」「青」「情」「著」を略体或いは異体字とする一方、「漢」「興」「閨」「總」「禪」「尽」「声」「變」「体」字を正体とする相異がある。

総じて「元」刊本系統に出ると言っても、同本の明らかな誤字を継承する所はなく、「明」刊黒口本に合致する所がある。しかし本版では寧ろ改正した文字が多く、結果的に原本とは異なり、独特の文字となった場合も多い。そうした傾向は字体にも現れ、一部に略体の採用を進めたものの、「元」刊本に比べ正字に回帰する箇所も多いが、必ずしも原本の形ではない。要するに、本版は一種の校訂本文を有するのであり、その意味でも中国に於ける本書流布の一画期を成した版本と言える。

〈上海図書館 七六〇二〇七—一四〉

白棉紙印

八冊

新補淡藍絹表紙(二七・〇×一七・〇浬)、淡青包角。本文白棉紙、襯紙改裝。見返し宣紙。潜仙氏序、黃序を存し本文。第二、四冊に各三卷、第五冊に四卷を収める他、每冊二卷。卷六第十八、十七張、卷八第二十、十九張、卷十四第六、五張、卷十五第十九、十八張錯、卷二第十三至十四張と卷三第十三至十四張を相互に錯綴。

龍沙識語のある大尾後半張は刪去、紙葉を足し版心左半と三分分の匡郭界線を鈔補す。首に方形陰刻「秦確／之印」、单辺方

形陽刻「石／林」朱印記を存す。

〈国立公文書館内閣文庫 三六三・一〇〇〉

白棉紙印

八冊

香色表紙(二八・五×一七・一浬)首冊のみ左肩打付に「玉屑(書録)」(全計二十卷(浬録))と書し、卷数左傍に单辺方形陽刻「某華亡伴」朱印記を存す。さらに每冊(首冊は上記を補い)左肩打付に別筆にて「詩人玉屑」「幾(之)幾」と書す。首冊のみ右下方に双辺刷梓の小簽を貼布、「文史」「」と朱書。每冊中央に旧蔵書票二種を貼附す。改系。本文白棉紙、天地截斷。潜仙氏序、黃序を存し本文。第二、四冊に各三卷、第五冊に四卷を収める他、每冊二卷。

朱傍点、傍圈、本文校改、欄上批注書入、別手墨傍句点、標傍句圈、行間欄上批注書入あり。首に方形陰刻「幾生／修致／樸華」朱印記、双辺橢円形陽刻「萬／記子」朱印記、每冊前表紙右肩並に末尾に单辺方形陽刻「昌平坂／學問所」墨印記、每冊尾に陽刻「天保乙未」朱印記、每冊首に双辺方形陽刻「淺草文庫(書箱)」朱印記、单辺同「書籍／館印」朱印記を存す。

〈蘇州図書館 〇九四・〇四・七六一〉

四冊

新補藍色表紙（二七・九×一六・〇糎）本文料紙、漉き目を豎に用いる。虫損修補。見返し、副葉宣紙。首尾冊のみ前副二葉。潜仙氏序、黄序を存し本文。第三冊に六卷、第四冊に四卷を収める他、毎冊五卷。

卷中書入の曲截符号を刪去する。卷首並に第二以下の毎冊首に单边方形陽刻「蘓南／文管會／珍臧」朱印記あり。

〈北京・中国国家図書館 三三二〇〉

八冊

新補淡紅表紙（二六・三×一五・九糎）。淡青包角。虫損修補、襯紙改裝。前後副葉。黄序を存し、潜仙氏序を欠いて本文。第二、四冊に各三卷、第五冊に四卷を収める他は、毎冊二卷。稀に朱筆にて本文重書校改、墨筆にて行間補注書入。卷首、第三、五、七冊首に单边方形陽刻「陸鏡／和印」朱印記、大尾龍沙識語前に方形陰刻「元美／氏」、单边方形陽刻「片玉／圖書」朱印記を存す。

〈北京・中国国家図書館 九三三八〉

十冊

張壽鏞旧蔵

新補藍色表紙（二八・九×一八・八糎）、右上綫外打付に冊数朱書。金鑲玉裝、原紙高約二四・五糎。虫損修補、天地截斷。見返し、前後副葉（二或いは三葉）宣紙。黄序、潜仙氏序を存し本文。第六冊に四卷、第八、九冊に各一卷を収める他は、毎冊二卷。卷十第十三張を卷尾に錯綴す。

首三冊のみ朱傍句圈書入刪去痕、朱墨校補注書入、稀に行間欄上墨補注書入あり。首に方形陰刻「張印／壽鏞」、单边方形陽刻「詠／寛」、同「四明張氏／約園臧書」朱印記を存す。

〈北京大学図書館 □八一・一〇四・二六〇三〉

四冊

白紙印 清潘景鄭旧蔵

新補素表紙（二六・六×一六・八糎）左肩打付に「詩人玉屑（卷幾之幾）」と、右肩より門目を書す。本文白紙。天地截斷。見返し並に前副二葉、宣紙。潜仙氏序、黄序を存し本文。第二冊に六卷、第四冊に四卷を収める他は、毎冊五卷。

朱墨標豎傍句点、句圈、墨釘鈔補、欄外行間標批補注、校改書入あり。首に单边方形陽刻「曾在潘／景鄭家」朱印記、第二冊首に方形陰刻「王□／里印」を存す。

同 二十二卷

〔明〕刊

右の嘉靖六年序刊本の直接の影響下に、次の一版が認められる。この版本は二十二卷を擁し、一見すると別本の如くであるが、後に述べる様に、増編を装った同系統の版本である。

先ず黄序（四張）、「（上略）淳祐甲／辰長至日玉林黄（昇）叔暘序_{（行）}」、次行下单辺亀甲形陽刻「玉林_{（書）}」鐘形「清則／後人」、单辺方形陽刻「黃氏／圖書」印記摸刻。門目を欠き、本文。知見一本のため不完全の所もあるが、以下に分巻の様子と張数を示す。

- 卷之一（二三張）詩辨 至 詩法
- 卷之二（三〇張）詩評 至 詩體
- 卷之三（九張）句法
- 卷之四（二〇張）唐人句法 至 宋朝警句
- 卷之五（二〇張）風騷句法
- 卷之六（八張） 至 詩有四鍊
- 卷之七（二三張）口訣 至 初學蹊徑
- 卷之八（存一至二十張）命意 至 下字

- 卷之九（二六張）用事 至 屬對
- 卷之十（二〇張）煅煉 至 點化
- 卷之十一（二四張）托物 至 白戰
- 卷之十二（二二張）含蓄 至（知音）
- 卷之十三（二三張）詩病 至 考證
- 卷之十四（二一張）品藻古今人物
- 卷之十五（二四張）兩漢 至 靖節
- 卷之十六（一六張）草堂
- 卷之十七（二六張）王維 至 常建
- 卷之十八（二〇張）香山 至 晚唐
- 卷之十九（三〇張）西崑體 至 雪堂
- 卷之二十（二六張）涪翁 至 郭功甫
- 卷之二十一（二六張）中興諸賢
- 卷之二十二（二三張）禪林 方外 閨秀 靈異 詩餘
- 单辺（一九・〇×一一・七糎）有界、每半張十行、行二十一字、半方匠体。版心、白口、上辺に「瑞昌府」と、中段に「幾卷（フ）」或いは「詩人玉屑卷之幾」と標し、下方に張数。尾題「詩人玉屑卷之幾（終）」「新刊詩人玉屑十五卷（終）」等。大尾の同位置に、底本と同文の龍氏識語を存す（図版八）。

本版卷四の首題は「唐人句法」(天地横覧)〈詩人玉屑卷之四〉(大字略行)

と不自然な形で、巻六の首題も「風騷句法」門の中途に四格を低して標示され、張子の更新に乗じて強ちに分巻した模様である。本版は嘉靖版の翻刻といっても行款を踏襲せず、一行を減じて、毎巻一、二張を増している。しかし元版以来、嘉靖版にも引継がれた、巻三「二十三之二十五」、巻四「九之十一」、巻十「十五之十七」前後の欠損はそのままとされ、張数のみ一通とした。また巻十五第三至四張の上辺に軒並み墨釘を有つが、これは二十巻十一行本の巻十三第三張前後の箇所に当たり、嘉靖版に生じた墨釘を踏襲したものである。更に本版では、四十三前二「■岸」、同十一「郷■聞」、同十五前三「／凍■含」、同六「平■野」、同十六前五「暑■浮」、同後一「樓■月風■送」以下の、新たな故障を増加している。本版は大尾の識語を受けて版心に「瑞昌府」と標出するため、官府の版刻と受け取れなくもないが、版式字様の粗雑な点、本文の未校と思しく、巻数張数には糊塗の見られる点などは、坊刻本の如くであり、俄に官版と見なすことはできない。

〈愛知県立大学図書館 九二二・二・一 (至八)・二三〉 八冊

脇坂安元旧蔵 明治十七年向山黄村校注書入鈔補識語

後補香色己繫文空押艶出表紙(二三・三×一三・八厘)左肩打付に「詩人玉屑(幾之幾)」と書す。首冊、題下に本文識語同筆にて「手校本」、右下方に「一凡」と、尾冊題下に「甲申夏初手校」と朱書す。押し八双あり。五針眼、改糸。虫損修補、原修補あり。毎冊前副葉。見返し、副葉後補。黄序を存し、門目三葉を鈔補し、本文。

首に単辺方形陽刻「程伊／之印」、方形陰陽刻同文朱印記(後者を二回鈴す)、首並に巻九、二十首に方形陰刻「馮印／皆可」、卷首並に巻九、二十首に同「藕華菴」「阿／瑛」、單辺方形陽刻「修光／子」朱印記を存す。間々朱句点、傍句圈、行間校改、欄上校注、磨滅、破損鈔補書入、藍傍句点、傍句圈書入、墨行間校補、欄上校改書入、識語同筆朱行間校改、欄上校注書入あり。淡紅不審紙。毎冊首に方形陰刻「(雙龍)八雲軒」朱印記、毎冊尾本紙或いは補紙上に方形陰刻「脇坂氏／淡路守」、円形陰刻「(藤花)藤／亭」、双辺方形陽刻「安／元」朱印記(以上四顆、脇坂安元所用)。薄葉を以て第一冊卷首前に鈔補三葉、末に校注書入同筆にて「此本無門目今据正中本補入甲申初夏榮誌」、卷三(第一冊)末「甲申上巳後三日以正中刊本對校」過風雨滿

窓殘寒側々／ 呵筆誌于石轍書屋黃道人」(中略)、卷七尾「甲申暮春以正中刊本一校是正誤脫黃村居士」、第二冊尾鈔補末「右二頁據正中刊本補闕明治甲申莫春十四日榮記」(中略)、第三冊尾「甲申暮春廿一日以正中本校校於石轍書／屋短檠下小松居士」(中略)、第四冊尾「暮春廿二日燈下一校」(中略)、第五冊尾「甲申四月三十日以正中本一校是正誤字／^(格)黃村迂人燈下記」(中略)、第六冊尾「甲申四月三十日夜一校黃道人」(中略)、卷十九尾「甲申五月初以正中本校讐一過午後淵揀庵／^(以下低格)杉恒篠來話楊守敬亦至清談半日黃昏各／散去黃村道人題於石轍書屋」、卷二十尾「甲申五月初燈下校此卷一據正中本是正／^(以下低格)是夕清公使下僚劉慶汾周其照陶杏／南來過筆語數刻 向榮記」(中略)、卷二十二後十二張鈔補、大尾「借友人杉本恒篠所藏正中本一校補正誤脫／甲申初夏七日黃邨居士石轍書屋識」朱識、首尾に方形陰刻「向黃邨／珎臧印」朱印記、每冊首に單辺方形陽刻「愛知縣立／女子専門／學校之印」朱印記を存す。

右の伝本は江戸前期以前の将来で、飯田藩主脇坂安元の旧蔵、転々して幕末明治の漢学者向山黃村の手に渡り、黃村は明治十七年(甲申、一八八四)三月から五月にかけ、杉本恒篠所蔵の「正中刊本」を借りて本書の校勘を行った。この本恐らくは、本稿

に言う日本(南北朝)刊有跋本のうち、台北故宮博物院収蔵楊氏觀海堂藏書中の十冊本そのものに相当する。黃村による卷十九後の朱識を見ると、杉本氏との清談に楊守敬も加わっているから、杉本氏から楊氏に渡った経緯も窺われる。正中跋本は卷二十までは原本に基づき、卷三十一至三十二に増補を有するから、〔元〕刊本以来の不足本に当たたる本版との異同は甚しいが、書入、鈔補や貼紙を施して黃村はその全てを録している。⁽³⁶⁾

新刻詩人玉屑二十二卷

明胡文煥校

〔明〕刊〔格致叢書〕本 翻〔明〕刊本

二十二卷本にはまた、胡文煥校正の一版が確認されるが、これは明万曆間胡氏文会堂刊行の『格致叢書』の一編である。

首に黃序(三張)、(上略) 淳祐甲□／長至日玉林黃昇叔暘序^(世譜)、印記摸刻せず。無界、七行十二字。尾題「序(畢)」。

卷首題「新刻詩人玉屑卷之一／^(以下二行低六格)宋菊莊魏慶之醇父編輯／明全菴胡文煥德父校正／^(大字通行)詩辨^(此下無行)／^(低三格)滄浪謂當學古人之詩」、次行より本文。夾注^(小字、又行)、每章改行。

卷之一（二四張）	詩辨 至 詩法
卷之二（二九張）	詩評 至 詩體
卷之三（二〇張）	句法
卷之四（二〇張）	唐人句法 至 宋朝警句
卷之五（二〇張）	風騷句法五言
卷之六（八張）	風騷句法七言 至 詩有四鍊
卷之七（二三張）	口訣 至 初學蹊徑
卷之八（二一張）	命意 至 下字
卷之九（二七張）	用事 至 屬對
卷之十（二三張）	煅煉 至 點化
卷之十一（二五張）	托物 至 白戰
卷之十二（二三張）	含蓄 至 知音
卷之十三（二三張）	詩病 至 考證
卷之十四（二一張）	品藻古今人物
卷之十五（二四張）	兩漢 至 靖節
卷之十六（二七張）	草堂
卷之十七（二八張）	王維 至 常建
卷之十八（二一張）	香山 至 晚唐
卷之十九（三二張）	西崑體 至 雪堂

卷之二十（二七張） 涪翁 至 王仲至

卷之二十一（二七張） 中興諸賢

卷之二十二（二五張） 禪林 方外 閨秀 靈異 詩餘

左右双辺（一九・二×一二・九糧） 有界、每半張十行、行二十字、写刻体。版心、白口、上辺題「詩人玉屑卷幾」、双白魚尾^{（向対）}、上尾下圈発、下尾下張数。尾題「新刻詩人玉屑卷之幾（終）」。

この本、二卷を増しているが、これは底本に従い、二十卷本の卷三至四（句法門）を開いて四卷に分けたためである。また卷十四至十六（二十卷本の卷十二至十四、品藻古今人物門首至草堂章）の本文は元明間の欠失を踏襲する。さらに卷十五第三至四張に、二十一字毎に空格を存するのは、嘉靖版以来の、底本の墨釘を補い得なかったものであろう。

胡文煥、字は德父、全庵、文会堂、また抱琴居士と号す。錢塘の人。万曆天啓間に『格致叢書』を発刊した。

以下、調査を及ぼした単行本のみを掲げる。

〈台北・国家図書館 一四七四九〉

十冊

清陳承裘旧藏

新補淡黄絹金切箔散表紙（三〇・〇×一九・一糧）。改糸。表

紙裏面に銀箔を散らした丹紙を差夾む。裏打改装、原紙高約二八・二糶。見返し、副葉新補。黄序を存し本文。第三、六冊に各三卷を収める他は、每冊二卷。卷十三第一張鈔補。

卷二十一に墨句圈、傍点、行間欄上批注書入。首に单边方形陽刻「三山陳氏居／敬堂圖書」朱印記（陳承裘所用）、貼紙して同「希古／右文」朱印記、大尾に方形陰刻「不薄今／人愛古人」朱印記あり。

新刊古今錦繡詩人玉屑二十卷

〔明〕刊

先ず黄序（四張）、「（上略）淳祐甲／辰長至日玉林黄昇叔暘序（書行）」、次行下单边亀甲形陽刻「玉林」、鐘形「清則／後人」、方形「黄氏／圖書」印記摸刻。六行、行字数不等。

卷首題「新刊古今錦繡詩人玉屑卷之二／詩辯（大字跨行）（第一）／（底三）滄浪謂當學古人之詩」、各卷の内容は、欠佚も含め嘉靖版に同じ。以下に張数のみを列する。

卷之一（二三張）

卷之二（三〇張）

卷之三（二七張）

卷之四（一六張）

卷之五（二三張）

卷之六（二〇張）

卷之七（二六張）

卷之八（二二張）

卷之九（一四張）

卷之十（二一張）

卷之十一（二三張）

卷之十二（一一張）

卷之十三（二三張）

卷之十四（一五張）

卷之十五（一九張）

卷之十六（二〇張）

卷之十七（一七張）

卷之十八（一七張）

卷之十九（二六張）

卷之二十（存一至十一張）

四周双辺（一七・六×一二・三糶）有界、每半張十一行、行十

九字。版心、上辺題「詩人玉屑」、中黒口（下辺接）、双線黒魚尾（向不對）、上尾下標「幾卷」、下尾下張数。尾題「新刊古今錦繡詩人玉屑卷之二終」等。

〈北京・中国国家図書館 四三〇二〉

清劉惺棠 瞿鏞旧藏

十冊

新補淡茶色表紙（二三・七×一五・三糎）右肩綫外打付に冊数を書す。素絹包角。襖紙改装。見返し宣紙、匡郭界線のみ鈔補。前後副葉、首に「詩人玉屑／明刊／十本」と書し、方形陰刻「子離／金石」朱印記を鈐する紙箋を差夾む。黃序（首半葉欠）を存し本文。每冊二卷。卷九第一至二張、卷十七第四至五張、卷十九第十七至十八張、卷二十第十二張を欠き、紙葉を補って界線を鈔補す。

卷十二、十四尾に無文の竹紙各五葉を加う。朱標圈、傍線、句点、欄上批注、本文重書校改書入あり。卷一、四、七、十、十四、十八首に陽刻「空翠閣／臧書印」朱印記、单边方形陽刻「彭城／伯子」朱印記、卷首に方形陰刻「曾在東山／劉惺棠処」（劉惺棠所用）、同「鐵琴銅／劔樓」朱印記（瞿鏞所用）を存す。

詩人玉屑二十卷 凡例（并詩法）一卷

明謝天瑞校（例）校者撰

〔明萬曆二十六年〕（戊戌、一五九八）序刊

先ず謝天瑞序（三張）、首題「重刊詩人玉屑序／（中略）」予因見是／書久無善本相傳謹以故祖／珍藏元版三復考訂一字無訛誠不敢自秘迫與同志者共之（中略）／皇明歲次戊戌冬十有一月／望後三日武林後學復古齋／思山謝天瑞識（書楷）、次行下方形陰刻「思山／道人」「詩祀／傳家」印記摸刻。五行十一字。

次で黃序（第四至八張）、「（上略）」淳／祐甲辰長至日玉林黃昇叔／暘序（書楷）、次行下单边龜甲形陽刻「玉林」、鐘形「清則／後人」、方形「黃氏／圖書」印記摸刻。五行十一字。

次で凡例并詩法（三張）、首題「詩人玉屑凡例（并詩法）／（低三）具例于后」（隔四）武林復古生謝天瑞著、次行より低二格、一ツ書下に条例。第四十二条に至る。尾題「玉屑凡例詩法終」。次で目錄（七張）、首題「詩人玉屑目錄」、次行に卷数を標し、次行より低一、六、十一、十六格にて門目を標す。二十卷、詩餘に至る。五行十二字格。尾題「詩人玉屑目錄終」。

卷首題「詩人玉屑卷之第一／詩辨（大字）（跨行）（隔六）武林思山謝天

瑞校正／(紙四)滄浪謂當學古人之詩」、次行より本文、每章改行、
毎門改張。欠失等、前本に同じ。

卷之第一 (二三張)

卷之第二 (三〇張)

卷之第三 (二九張)

卷之第四 (一八張)

卷之第五 (二三張)

卷之第六 (二〇張)

卷之第七 (二五張)

卷之第八 (二二張)

卷之第九 (一四張)

卷之第十 (一五張)

卷之第十一 (二三張)

卷之第十二 (一〇張)

卷之第十三 (二三張)

卷之第十四 (一五張)

卷之第十五 (二六張)

卷之第十六 (二〇張)

卷之第十七 (二九張)

卷之第十八 (三一張)

卷之第十九 (二五張)

卷之第二十 (二三張)

単辺(二〇・五×一二・四糎)有界、毎半張十行、行二十二字。
版心、白口、単白魚尾下題「玉屑卷之幾」、張數。尾題「詩人
玉屑卷之十九終」等。

現存の宋元版に比べ、款式を十行と寛く取ったため、毎卷の
張數は微増となっているが、卷十二至十四間の不足部分に増益
はない。諸版に比べても略字や訛字が極めて多く、挙例詳説す
ることは、その煩に堪えない。一方、「元」刊本に対する明嘉
靖六年序刊本の誤りは必ずしも踏襲しない。また謝氏が凡例并
詩法として要諦を示し、明版諸本に欠けていた目錄を新編附刻
した点は、本版に特有である。

謝天瑞、字は思山、復古齋と号す。杭州の人。万曆二十七年(一
五九九)頃に『詩法』と『詩餘補遺』や『通用中原音韻』を版刻、
同二十九年に『鶴林玉露』を増補刊行した事蹟が知られ、本版
の序も万曆二十六年と見なされる⁴⁷⁾。

〈上海圖書館 T三三七〇四〇一九〉

十冊

合衆図書館旧蔵

後補香色表紙（二七・四×一六・八糎）。一部襯紙、或いは裏打修補。見返し白紙。謝序、黃序、凡例、目錄を存し本文に入る。第六冊に三卷、第九冊に一卷を収める他、毎冊二卷。卷十八第七、九張を相互に錯綴。

墨傍点、傍句圈、朱句点、句圈書入あり。毎冊首に单边方形陽刻「樸學／齋藏／書印」朱印記、同「合衆圖書／館藏書印」朱印記を存す。

〈台北・国家図書館 一四七四八〉

十六冊

後補香色表紙（二七・七×一六・九糎）、改糸。虫損修補、襯紙改裝。見返し、副葉宣紙。謝序、黃序、凡例、目錄を存し本文。第四、八至十冊に各二卷を収める他は、毎冊一卷。卷十五第十六張欠、紙箋を差夾み「十六頁脱當補」、卷二十第九張欠、同じく「脱第九葉須補」墨書。卷首匡郭二〇・四×一二・三糎。極稀に欄上墨校改書入、又「清」人朱筆にて行間校改、破損鈔補、批注書入あり。卷首に单边方形陽刻「漢鹿／齋藏／書印」朱印記を存す。

〈浙江図書館 五七九七〉

八冊

清王修旧蔵

後補墨染表紙（三〇・二×一八・〇糎）、改糸。金鑲玉裝、原紙高約二七・九糎、虫損修補。見返し、副葉宣紙。「謝」序（第三張後半刪去、匡郭のみ鈔補）、黃序、凡例、目錄を存し本文。第三至四冊に各三卷、第五冊に四卷を収める他は、毎冊二卷。朱傍句点、声傍圈、行間欄上批注、校改、鈔補書入、別墨批圈、曲截、欄上標圈、行間批注（李義山門「此條未然」語）書入。又別朱墨貼紙評語書入。首冊前副葉前半左肩に小簽を貼附し「舊無帙戊申巧月／獻民裝於絳州分／署之目足寮」墨識並に单边方形陽刻「紀」、方形陰刻「煥述」朱印記を存す。又首に紙箋を貼附し「此亦閱微艸堂藏本在中批語是各出自 文達公筆跡互整似之間無從考訂觀二卷中誠當評隱蓄發露／一條批義山詩云此條未然與能批玉溪生全集又不翅重規疊矩意比戒 公少時評閱坡真蹟與後來所同乎」墨識あり。首に方形陰刻「河間紀氏／延澤堂／藏書印」朱印記、大尾補紙上に同「紀氏／希錢／所藏」朱印記、单边瓢形陽刻「瀛／海」朱印記、方形陰刻「長興／王氏詒／莊樓藏」、卷首に单边方形陽刻「楊弇／祕笈」、同「長興王修所藏善本」朱印記（以上三顆、王修所用）を存す。

王修、字は季歡、楊庵と、又詒莊樓と号す。浙江長興の人。光緒二十四年（一八九八）生、清末民国期の蔵書家で、民国十九年（一九三〇）頃に『詒莊樓書目』を發刊した。当該の伝本を、その巻八に「明覆宋本」として著録する。民国二十六年歿。

同 二十卷

明汪元臣等校

〔明〕刊

先ず黄序（四張）、首題「詩人玉屑序／（中略）淳祐甲／辰長至日玉林黄昇叔暘序（書行）」、次行下单边亀甲形陽刻「玉林」、鐘形「清則／後人」、方形「黄氏／圖書」印記摸刻。五行不等。次で目次（四張）、首題「詩人玉屑目次」、至卷二十「詩餘」。单边、写刻体。

卷首題「詩人玉屑卷之一／
詩辨（大字）
跨行（隔五）（新都汪元臣輔嗣
甫訂／兄汪元義長馭甫校）／
（格低四）滄浪謂當學古人之詩」、次
行より本文、每章改行。以下、每卷の張数に校者名左行を附記
する。

卷之一（一二張）兄汪元義長馭甫校

卷之二（二八張）汪可牧公宅甫校

卷之三（一至「二十三之二十五」至二十八張）

汪兆禎仲開甫校

卷之四（一至「九之十一」至十八張）

江宗岷季梁甫校

卷之五（一二張）曹時可無住甫校

卷之六（一九張）汪康運當世甫校

卷之七（二四張）吳維標仲謙甫校

卷之八（二一張）方秉正于繩甫校

卷之九（二三張）王時隆道隆甫校

卷之十（二二張）汪光耀啓宗甫校

卷之十一（一二張）汪有光充如甫校

卷之十二（一至「又五」至「又八」至十三張）

汪龍光伯震甫校

卷之十三（一九張）汪成龍幼玉甫校

卷之十四（一至「十／七」十八）至「二十之二十一」至

二十三張）汪長孺孟公甫校

卷之十五（二五張）汪翼龍子羽甫校

卷之十六（一九張）汪季舒善卷甫校

卷之十七（二八張） 汪學龍季鯉甫校

卷之十八（二五張） 汪脩能靈均甫校

卷之十九（二四張） 汪世龍經甫甫校

卷之二十（一至「又六」至二十一張）

汪維翰申甫甫校

四周双辺（一九・〇×一二・三浬）有界、每半張十一行、行二十一字。版心、白口、單白魚尾下題「玉屑卷幾」、張數。尾題「詩人玉屑卷之幾（終）」。

本版の後掲中国国家図書館蔵本は、卷一第一至四張、卷八第一至二張、卷十第十五至十六張、卷十一第三至六張、卷十三第七至八、十至十一張、卷十四第九至十張、卷十五第十五至十六張、卷十六第一至四張、卷十八第一至二、七至八、二十五張、卷十九第三至六、十五張、卷二十第九至十、十八、二十一張の字樣を他と異にし、既に補刻の可能性がある。

汪元臣については未考。

本版は序跋等を欠き、刊刻の経緯や底本を具体的に知り得ないが、その本文は、前記の明刻諸版と異なり、卷十二至十四の間に欠佚なく、直接「元」刊本に基づいて、明刊諸本の系統には立たないようである。汪氏の校訂によって旧に復した可能性

もあるが、当面は「元」刊本系統の覆刻と見て、後の精査に俟ちたい。

〈北京・中国国家図書館 一一六三九〉

六冊

清顧広圻 潘遵祁旧蔵

新補淡紫色表紙（二七・二×一六・八浬）、右上綫外打付に冊数墨書。襯紙改裝。前後副二葉。黃序、目次を存し本文。第二至三冊に各四卷を収める他、每冊三卷。

朱句点、句圈、欄上批注書入あり。卷首尾に單辺方形陽刻「廣圻／案定」朱印記（顧広圻所用）、首に同「茶／僊」朱印記（潘遵祁所用）、首に同「蕪／路」、方形陰刻「劉矩／之印」、單辺方形陽刻「樂盒／劉氏／臧書」、目首に同「樂盒／所藏」、卷首に單辺方形陰陽刻「劉矩／之印」、同陽刻「範／吾」、卷首尾に同「劉樂盒／鑑臧印」朱印記を存す。

同 十卷 目一卷 補遺一卷

〔清〕刊 覆〔明〕刊本

明代後半に様々な版本が現れ、その中から清前期に、十卷本

の翻版が生まれた。しかしこの本は、やがて二十卷本に成長し、他を圧して清一代の流布本を構成した。現在までに都合四種の印本を確認しているが、一版が長く行われた格好である。

先ず黄序（四張）、（上略）／淳祐甲辰長至日／（格低五）玉林黄昇叔暘序（書補）、印記を欠く。六行十二字。

次で目録（二四張）、首題「詩人玉屑目録」、次行一格を低して卷数、次行二格を低して門目、次行より三格を低して章目を列し、卷十及び補遺、「考證」門の「釐訂古今詩」章に至る。尾題「詩人玉屑目次終」。

黄序の款式を変え、末尾の印記摸刻を省いた他、底本にはなかった目録を加えたが、宋元版以下、門目のみの標示と異なり、毎編の細目を列挙し一卷を成したことは、本版の特色と言える。卷首題「詩人玉屑卷之一／詩辨（大字）（第一）／（格低四）滄浪謂當學古人之詩」、体式は宋元版以来の形に同じ。毎巻の張数も同様であるが、版心の張付につき、卷三「十五之十七」、卷四「九之十一」の標記を廃し、通計の数を刻してある。また底本で卷一、二を通計四十張とした点も継承していない。

本版の卷十では、第十五張末の「寒乞」の門目を「品藻」と改め、「元」刊本以来欠損となっている第十六至十七張の「寒乞」「知音」

門の位置に卷十五の記事を点綴し、二十二張に復している。⁽³⁸⁾

四周双辺（一八・九×一二・三）有界、每半張十一行、行二十一字、写刻体。版心、中黒口（周内）、双線黒魚尾（周外）問題「玉屑卷之幾」、張数。尾題「詩人玉屑卷之幾（終）」。

次で補遺（一〇張）、首題「詩人玉屑補遺」、本文字様少異。

右の「補遺」は、単に二十卷本の卷十一の内容を添えたのみ、目録のように新增の内容ではない。従って全般には、底本に從う卷一至十の本文の前後に、目録と、補遺すなわち卷十一を置き、一書の体裁を整えたものであるが、次掲中国国家図書館本は、後掲の二十卷諸本よりも早印に属するから、不全十一巻の伝本を底本とした、本版刊行の一階梯を示すものと解される。本版の版刻時期は明らかでないが、版式字様、「玄」字を欠筆する点からも、清前期の版刻と認められる。

本版卷一の本文を「元」刊本に比較すると、第四張首「詩法」門首の「晦庵謂曾中不可着一字世俗言語」章目が門目下左行にあり、第四張末を空行とする他、二前一「具正法眼者是謂第一義」を「正法眼看」、二後十「詩有別材非閱書也詩有別趣非閱理」を「閱書」「閱理」、三前六「有所歎焉」を「馬」、三後二「始自出己法」を「己法」、同十一左「謂古律之體備也」を「唐律」、

四前五「下及唐初」を「下及漢唐初」、五前十一「字字皆皆奇」

を「皆奇古」、六前十一「學竟無方作無路」を「無畧」、六後四

「詩卷熟讀治擇工夫」を「二夫」、七前一「學詩者貴乎」を「論

首」者、同六「一夜水長至梢頭」を「稍頭」、同十一「渾疑春

雪墮林梢」を「林稍」、八前十「直待自家都肯得」を「都了得」、

十後二「體物不欲寒乞 意中有景」を「須意中」、十一前九「剡

溪歸櫂是已辭意」を「以辭意」と誤り、「眞」爲「韓」「清」「體」「輩」

「蕭」「無」「關」「輩」「蕭」「情」「辭」「盡」字を略体或いは異

体とする一方、「漢」「總」「禪」を正体とする相異がある。

全体に、底本からさらに誤った場合が目につき、明嘉靖六年

刊本のような改訂本とは一線を画する。略字の採用も漸次増し

ており、結果として「元」刊本と合致する例がある。

〈北京・中国国家図書館 一四五一一〉

白紙印 欠卷一至二

五冊

新補藍色表紙（二七・三×一七・一糎）右上綫外打付に冊数朱

書。本文白紙、襯紙改裝。前後副葉。第一冊に黃序、目錄を存

するも、第二冊は卷三より本文。第三冊に三卷、第五冊に一卷

と補遺を収める他は、毎冊二卷。

又 二十卷 目一卷

増修（處順堂）

卷十一至二十覆明嘉靖六年（一五二七）序刊本

本版には、卷十二至二十を増補追刻した印本がある。この増刻部分は明嘉靖六年刊本に拠っている。

封面、単辺有界「重刊元版／詩人玉屑^{字大}／^{格低}處順堂藏板^{書楷}」

牌記あり。黃序に次で目錄（四八張）、増刻して卷二十「詩餘

門の「舊詞」章に至る。尾題「詩人玉屑目錄（畢）」。

補遺の第一至二張を卷十一第一至二張と彫り換え、さらに卷十

二以下の諸卷を増修す。

底本に同じく大尾に「瑞昌府章涯（右山）龍沙識^{楷書}（左傾）」原識語あり（図版九）。

試みに卷二十の本文を、底本に比較して見ると、一前十一「語

帶煙霞從古少」を「江霞」に作り、八後十「苟不沈沒得之者」

を「得之老」と誤るなど、極少数の例外を除いては、字体に至

るまで直接嘉靖刊本に拠ることが明らかであり、「元」刊本二

後二「載月明歸」を「明月」「三前九「參寥詩云」を「參差詩云」

とする嘉靖刊本の誤りをもそのまま継承している。結果として

この二十巻本は、前半に〔明〕刊十巻本の、比較的粗雑な本と、後半に明嘉靖六年序刊本の、ある程度校訂された本と、性格の異なる本文を承け、接合したものであり、巻十の中に巻十五中の記事が重出するものも、そうした増修の過程を反映している。以下に所見の伝本を列挙するが、その数が多い上、未見の本も少なくない。現在のところ俄に印刷の先後を定め難いため、仮に稿者著録の順とする。

〔中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館 五六—三 八冊

清楊浚 王礼培旧藏 二九二〇六

新補香色表紙（二五・四×一六・二糎）、淡青包角。次で後補藍色表紙を存す。破損修補、襯紙改裝。前後副葉新補。黃序、目錄を存し本文に入る。第一冊に一卷、第二、七至八冊に各二卷、第五冊に四卷を収める他は、毎冊三卷。卷二十第二十三張（大尾）を欠き鈔補。

朱傍句点、傍句圈、墨欄上批注書入、首のみ藍筆鈔補書入あり。目首題下に「宋魏慶之菊莊簪」と墨書す。目首に单边方形陽刻「冠梅」、卷首に方形陰刻「楊浚／私印」、单边方形陽刻「雪／滄」朱印記（以上三顆、楊浚所用）、方形陰刻「禮培／私印」、单边

方形陽刻「埽塵／齋積／書記」朱印記（以上二顆、王礼培所用）を存す。

〔天理大学附属天理圖書館 九二一・一二七〕 六冊

後補丁子染雷文繫蓮華唐草文空押艶出朝鮮表紙（二八・六×一七・九糎）、左肩打付に「詩人玉屑禮（樂射御書數）」と、右肩より門目を書す。五針眼、紅糸。裏打改裝。前副葉後補。黃序、目錄を存し本文。第一冊に二卷、第二冊に四卷、第四冊に五卷を収める他、毎冊三卷。

朱墨藍傍点、傍圈、朱標点、稀に欄上墨校補注書入あり。首に单边方形陽刻「金陵居士」、毎冊首に方牌中円形陰刻「周／女南象／召」暗朱印記、单边方形陽刻「葛城／藏書」朱印記を存す。新京興亜胡同二〇七稻葉光吉より京城西小門町李王家美術館（徳寿宮）葛城岡隠宛て書簡を附す。⁽¹⁰⁾

〔上海圖書館 四八八六七五〕 一冊

存卷十五至十七 白棉紙印 清顧曾寿旧藏
香色表紙（二七・四×一七・〇糎）左肩打付に「詩人玉屑（第
五本）」と、右肩「共六本全」と、その左に一格を低し門目を書す。

本文白綿紙。卷十五首匡郭一・四×一三・二。糧。

朱句圈、欄上校補批注書入あり。首に方形陰刻「顧曾／壽」「宛安／秘翫」朱印記を存す。

〈上海図書館 五一九一七〇—七七〉

合八冊

尾欠

後補藍色表紙（二六・四×一七・四。糧）。改糸、欄紙改裝、天地截斷。見返し、前副葉宣紙。黃序を欠き、目錄を存し本文。第一冊に一卷、第三、八冊に各三卷、第五冊に五卷を収める他、每冊二卷。卷十四第四、三張と、卷二十第十二張を第十四張後に錯綴。卷十九第二張欠、鈔補、卷二十第三至二十三張欠。

墨傍豎句点、傍句圈、本文校改、欄上標批注書入。卷一、十一首に単辺方形陽刻「有名間／富貴無／事小神仙」朱印記を存す。

〈上海図書館 長〇一六五九八—六〇七〉

十冊

虎丘萃古齋發兌

後補淡茶色漉目表紙（二七・八×一七・九。糧）。素絹包角。改糸、欄紙改裝。見返し副葉宣紙。封面、白紙印、右下方に単辺方形陽刻「虎丘萃古齋／書坊發兌」朱印記あり。黃序、目錄を存し（以

上一冊）本文。第四冊に三卷を収める他は每冊二卷。卷十八第二十五張（尾）を第十冊（卷十九至二十）の首に綴す。比較的早印。

萃古齋は、清乾隆嘉慶間の人、錢聽默の設けた蘇州の書肆^①。但し処順堂との関係は不明である。

〈上海図書館 〇一三二一九—三〇〉

十二冊

首欠 清許乃普 民国于右任旧藏

後補黃色艶出銀切箔散表紙（二七・四×一七・八。糧）、淡青包角。虫損修補、欄紙改裝。見返し、前後各二枚の副葉宣紙。第四、八至十一冊に各一卷、第七冊に三卷を収める他、每冊二卷。早印。墨句圈書入。首に単辺方形陽刻「演／生」方形陰刻「臣許／乃普」暗朱印記、大尾に単辺方形陽刻「泉塘耀／松楊祉／昌經眼」朱印記、每冊首に同「右任／之友」、第四冊首に同「于氏／世守」朱印記あり。

〈上海図書館 四五六一九六—二〇一〉

六冊

閩門文粹堂發兌 清沈曾植旧藏

香色表紙（二五・三×一六・〇。糧）、改糸。見返し宣紙。扉の

位置に封面、右下方に双辺方形陽刻「閩門後□廠北／文粹堂書坊發兌^{書牒}」朱印記あり。黃序、目録を存し本文。第一冊に一卷、第三冊に五卷、第五至六冊に各三卷を収める他、每冊四卷。後印。

每冊首に単辺方形陽刻「赤堇／山人」朱印記（沈曾植所用）を存す。

〈浙江圖書館〉

虎丘萃古齋發兌

合四冊

香色表紙（二八・四×一七・八糎）。破損修補。見返し新補。封面、白紙印、右下方に陽刻「虎丘太子馬頭萃／古齋書坊發兌印」朱印記あり。黃序、目録を存し本文。第一冊に四卷、第三冊に六卷を収める他、每冊五卷。

〈浙江圖書館 五七九九〉

八冊

清蔡鴻鑑旧蔵

後補淡青表紙（二五・七×一六・五糎）、右肩より「詩人玉屑二十局／魏菊莊輯四明蔡澥廬珍臧／癸酉夏仲得自甬申鴻鑑」墨識並に単辺方形陽刻「劔／白」、方形陰刻「鴻／鑑」「四明蔡

解／□鴻鑑／章」朱印記あり。次で藍色表紙、左肩打付に「詩人玉屑^{書牒}」と、首冊のみ右肩に「太」と書し、右下方に単辺方形陽刻「式／城」、方形陰刻「浙東／下土」朱印記を存す。康熙綴。淡青包角、襯紙改裝。見返し、前後副葉後補。黃序、目録を存し本文。第一冊に一卷、第二、七至八冊に各二卷、第五冊に四卷を収める他、每冊三卷。早印。

每冊首に方形陽陰刻「也園／書画記」朱印記、序末に方形陰刻「墨海／樓」朱印記、目首に単辺方形陽刻「解／蟾」、方形陰刻「玉壺／詩隱」、方形陽陰刻「千秋／鑑」、卷首並に第二以下每冊首に単辺方形陽刻「碧玉壺蔡鴻鑑／校書讀書之印」、卷首に同「蔡解／蟾青／箱□物」朱印記あり。

〈蘇州圖書館 四〇四・七六一〉

卷一至十配同版古松堂本

卷十一至二十を存す（六冊のうち三冊）。全体に関わる事項は後掲。

〈北京大學圖書館 □六六八五〉

四冊

清丁福保 李盛鐸旧蔵 民国李滂識語

後補香色表紙（二七・一×一六・八厘）、首冊のみ右肩より打付に「詩人玉屑（抄）二十卷四冊／（格紙）磨嘉館藏」と書す。康熙綴。破損、虫損修補。前後見返し宣紙、首のみ前副三葉。黃序、目錄を存し本文に入る。第一冊に三卷、第二冊に六卷、第三冊に七卷、第四冊に四卷を収む。

首冊前副第三葉前半に「詩人玉屑集唐人句法悉分其類有／裨於初學但風騷句法皆有標題如／馬疲、倦時銜草人疲望城則曰公／明布卦若芹、隨泥隨燕落花蘆上蜂／須則曰東方占鵲殆与棋譜牌譜相類／論詩不宜如此 四溟詩話一則鵬錄」墨書並に方形陰刻「鵬／圖」朱印記、第二冊剝離せる前見返し前半に「卷四第八葉後 宋本有胡越同舟一葉呂布中戟一葉方接句／ 欲得健」墨識あり。卷六第五、六張間に淡黃槩染紙箋を差夾み別筆にて「溪散稿（五卷）朝鮮洪良吉所著首有紀文達（有界）（公）題序」以下墨書。首に单边方形陽刻「（有界）丁福保／三十後／讀書記」、目首、第二冊首に同「曾臧丁／福保家」、卷首に同「丁福／保字／仲祐」朱印記、每冊首並に卷首に单边橢圓形陽刻「善本」朱印記、欄上朱校注書入（卷二十「靈異」門目前「卷之二十」後「卷之二十一」、大尾題後下辺に同筆「九日午後校畢是卷 滂記」朱識を存す。

第二冊前見返しの識語は、台北国家図書館収蔵の「宋末元初」刊本を見るとその如くであり、「元」刊本以来の卷四第九至十張の欠損を指摘した内容に当たる。また卷二十「靈異」門後に卷二十一を置くのは、前記日本「南北朝」刊有跋本系統との校合と目される。

〈東洋文庫 IV・六・八五〉

五冊

虎丘萃古齋發兌 藤田鎭牛旧藏

香色表紙（二六・五×一六・七厘）、右方綫外中段に「共五冊」と、下段に冊数を書す。康熙綴。前後副葉、同料の覆紙中に封面、白紙印、浙江図書館蔵本同種萃古齋朱印記あり。黃序、目錄を存し本文。第一冊に二卷、第四至五冊に各四卷を収める他、每冊五卷。早印。

卷首並に第二以下每冊首に方形陰刻「周子／耕雲」朱印記、目首並に第二以下每冊首に单边方形陽刻「藤田鎭牛／藏書之記」朱印記を存す。

〈横浜市・堀川貴司氏〉

五冊

新補藍色表紙（二八・二×一七・八厘）。素絹包角。改糸。見

返し新補。覆紙中に封面あり、白紙印。前後副葉（一或いは二枚、不定）。黄序、目録を存し本文に入る。第一冊に二卷、第二、五冊に各四卷、第三至四冊に各五卷を収む。早印。大尾識語を刪去し補紙を加う。

朱傍句点、傍句圈、本文校改、墨欄上校注書入あり。封面に單辺方形陽刻「蘭笑／樓臧／書印」朱印記、首に方形陰刻「樵孫／珍藏」朱印記、每冊首並に卷首に單辺方形陰刻「許／儀」、同陽刻「能／型」朱印記、首に方形陰刻「吳霖／霖印」朱印記、單辺方形陰刻「獨／醒」朱印記、方形陰刻「蛻廬／老人」朱印記、目首に單辺方形陽刻「吳淞瞿／西塘氏／家藏」朱印記、方形陰刻「吳積／慶堂」朱印記、卷首並に第二以下每冊首に「茂林／吳氏」朱印記、第二冊首に單辺方形陽刻「瞿西塘／氏圖書」朱印記を存す。

又 通修（古松堂）

封面、双辺有界「宋板重雕／詩人玉屑^{（大字）}／^{（小紙）}古松堂藏板^{（書行）}」牌記あり。

首尾の卷一第一至二張、卷二十第二十三張を改刻し、大尾の

龍沙識語を失った。卷首匡郭一八・六×一二・二。往々前記処順堂本に別版と著録されているが、ほぼ同版の後修、十卷不全の当初からすると通修本に当たると見られる（図版十）。

以下、伝本の掲出順は同前とする。

〈The Library of Congress V/K318.52/W42〉 十二冊

新補藍色表紙（二七・三×一六・五）。金鑲玉装、原紙高約二四・五。前後副葉新補。封面、素紙印。黄序、目録を存し（以上一冊）本文。第七冊に三卷、第十至十二冊に各一卷を収める他は每冊二卷。卷七第五至六張欠、卷二十第二十三張（大尾）鈔補。大尾に嘉靖六年序刊本、或いは本版処順堂印本の識語「瑞昌府章涯 〈右山〉 龍沙識」を摸写す。稀に墨句点、句圈書入あり。

〈上海圖書館 三六二二七五—八〉 合四冊

後補香色表紙（二六・一×一五・八）。改糸、第一冊書口に「^{（每字）}詩人玉屑六冊」と書す。黄序欠、目録第六張を存し、その前に六張、後に三張の紙葉を補う。本文第一冊に二卷、第四冊に四卷を補う他、每冊七卷。卷六第十四、十五張を欠き、紙葉を補う。

〈上海図書館 長三二〇二九—二四〉

合六冊

民国王植善旧藏

朱印記を存す。

後補香色表紙（二五・二×一五・八糎）、右下方綫外打付に「一

六三三」と書す。改糸。前後副二葉。首冊前副第一葉中に封面、

黃紙印。黃序、目録を存し本文。第一冊に一卷、第三、六冊に

各三卷、第四冊に六卷を収める他、每冊四卷。卷九第十二張鈔補。

卷首第二行下に「宋 魏慶之 編」墨書。首のみ墨欄上細筆

標注、破損鈔補書入。首並に卷四、十七首に单边方形陽刻「王

筱霞／所藏圖／書記」朱印記、卷首に同「王培／孫紀／念物」

朱印記（王植善所用）、卷九、十五、十八首に「上海市歷史文

／獻圖書館藏^{（善補）}」朱印記を存す。

〈台北・故宮博物院楊氏觀海堂藏書〉

六冊

新補香色表紙（二三・九×一五・〇糎）。改糸。次で香色表紙

を存す。虫損修補。封面、黃紙印。黃序、目録を存し本文。第

一冊に一卷、第三至四冊に各五卷を収める他、每冊三卷。卷九

第十三張（尾）欠。

間、朱行間校改、句点、墨貼紙校注（「此以下脱幾頁」等）、朱

墨傍圈、磨減鈔補書入あり。首に方形陰刻「飛青／閣藏／書印」

楊氏は別に、前掲建仁寺久昌院旧藏の日本〔南北朝〕刊無跋
配同有跋本を収蔵した。

〈蘇州図書館 四〇四・七六一〉

六冊

卷十一至二十配同版早印本

首冊前、尾冊後のみ新補藍色表紙（二五・二×一六・〇糎）、

次で後補香色表紙、左肩打付に「詩人玉屑〔総六冊〕」と書す。

右下方に单边方形陽刻「王／森」、方形陰刻「臣印／書磨」小

朱印記を存す。本文料紙厚手。覆紙中に封面、白紙印。前副葉、

黃序、目録を存し本文。第一冊に二卷、第五至六冊に各三卷を

収める他、每冊四卷。

首欄上に「己酉十二月初十／日展卷」朱識。卷三まで朱句点、

句圈、欄上標点、標圈書入あり。

〈北京大学図書館 □/811.104/26036〉

十冊

新補藍色表紙（二四・三×一五・六糎）。前後副葉宣紙。封面、

淡紅紙印、右下方に「己卯」等不明朱印記あり。黃序、目録を

存し（以上第一冊）本文。第七冊に四卷を収める他は每冊二卷。

墨標傍句圈書入あり。

又（首題 玉屑）

道光七年（一八二七）修

本版にはまた目録及び毎巻首題の「詩人」二字を全て挖去し空格の儘とした後印本があり、双辺有界「道光丁亥重校宋本（書格）／玉屑詩話（書格）／（書格）本衙藏板（書格）」の封面を伴う。知見一本のみにて断定は難しいが、封面にも「詩人」の文字を去っていることから、道光丁亥七年頃の所為と見なした。

〈上海圖書館 五二二・四五一五二〉

八冊

清光緒三十二年（一九〇六）曹元忠識語

香色表紙（二二・八×一五・一糎）。素絹包角。封面、黃紙印。黃序、目録を存し本文。第一冊に一巻、第二、六至七冊に各二巻、第五冊に四巻を収める他、毎冊三巻。

間、墨句圈、句点書入あり。首冊前表紙に「癸卯四月待榜入都寄十景花園 溥師弟中／（以下書格）間游隆福寺書肆因識書估王胖購此及怡／府舊藏大方通鑑而歸凌波詞估」墨識並に單辺方形陽刻

「君／直」朱印記、隔一行「梅磬詩話云建安魏醇父慶之號菊莊有陰稿行於世／所著詩人玉屑編類精密諸公多稱之又云菊莊與玉林／黃叔暘友善有過玉林詩云一步離家是出塵幾重山／色幾重雲沙谿清淺橋邊路折得梅花又見君亦有／新意今是書卷首有黃叔暘叙於菊莊品學推許／甚至韋氏所言洵不靈矣丙午元旦凌波書於怡春軒」墨識並に單円形陽刻「凌／波」朱印記、第四冊前表紙に「予髫歲時一日待 家君与 季父談詩偶顧架上詩／人玉屑命對予以哲匠金桴對云 家君甚甚遂命從／ 季父學聲律對偶云文今悠、忽、予亦四十有二矣長／此無間已負可畏之望縱非見惡可賅其終之年」墨識あり。卷首に方形陰刻「句吳曹／氏所藏／金石書／画之印」、單辺方形陽刻「瓶」、同「牋／經堂」朱印記（以上三顆、曹元忠所用）を存す。

曹元忠、字は君直、又夔一。箋經堂、瓶雲、凌波居士と号す。江蘇吳県の人。清同治四年（一八六五）生、民国十二年（一九二三）歿。首冊識語は光緒二十九年（一九〇三）癸卯の年、科試のために上京した折、隆福寺辺の書肆で本書を入手した経緯を述べ、光緒三十二年丙午元旦を以て韋居安『梅磬詩話』の參考記事を録する。第四冊の識語は、曹氏四十二歳の同年中に幼時を回顧し、本書に拠る詩学庭訓の一場を映している。

上記の著録を踏まえ、諸版の関係を図示すれば、以下のよう
になろう（↓は前本より翻刻の関係を表す）。

〔宋末元初〕刊本

↓日本〔南北朝〕刊無跋本（以上、原本）

↓日本〔南北朝〕刊有跋本

→（増補本）

↓朝鮮明正統四年（一四三九）跋刊本

↓日本寛永十六年（一六三九）刊本

後印本 後修本 正徳二年（一七一一）印本

↓〔元〕刊本

↓（卷十二至十四不足本）

↓〔明〕刊 黒口 補刻本

→（増補本）

↓〔明〕刊 十卷本

↓〔清〕刊 十卷本

↓明嘉靖六年（一五二七）序刊本

↓〔明〕刊 二十二卷本

↓新刻詩人玉屑〔明〕刊 胡文煥校二十二卷本

↓〔清〕刊 増修二十卷本 卷十一至二十

通修本 道光七年（一八二七）修本

↓〔明〕刊本

↓新刊古今錦繡詩人玉屑〔明〕刊本

↓〔明萬曆二十六年〕（一五九八）序刊 謝天瑞校本

↓〔明〕刊 汪元臣等校本

明代諸版には伝存しない版本の影響が想定されること、新校本が多く本文改訂の著しいことから、個々の依拠関係を特定することができなかった。しかし二種の流布本、即ち日本の寛永刊本と〔清〕刊本の来歴を、ほぼ明らかにすることができた。

本書は少なくとも、右の十五版を生み出しつつ、近世の東アジアに広がっていったが、もとの中国では一時、明前期に不調に陥ったようである。その様子は明嘉靖六年（一五二七）序刊本の潜仙氏の序に「往年嘗散失後之十卷、而刻於湖南者亦止前十卷」と述べていた点にも窺われるが、実際に明前期に遡る版本を見出し難い。その原因を本書そのものに見出すとすれば、既に元の方回が、『桐江集』巻七の「詩人玉屑攷」に本書の欠

点を述べ、本書への不信を露わにしていた。

方氏の説に拠ると、本書は、その内容が南宋に及ぶことを別にすれば、『漁隱叢話』の記事や体例に従うのみで特色がなく、便宜を重んじた編集姿勢は憎むべきものとされ、彼は最後にこうした欠点の原因を指摘し、閩人には大家の数に非らざる者があるとして、福建の編集家を批判している。

こうした元人の評は、出版後の本書への評価をある程度反映するであろう。確かに本書の『漁隱叢話』への依存は、出処として明示された以上に、大きいようである。^③元明間に本書への評価は、やはり少しく振るわなかったであろう。

ただ黄昇は、『漁隱』が浩瀚で検索に適しない点を述べたまで、逆に参考の効率を改善したことと、当代の詩法や逸話を加えたことは、成立時の本書の意義を示している。なお出処を後出とする編集法は、類書や辞書等の、便宜を優先する宋末の坊刻本にはよく見られ、詩話集にもそれを応用したので、魏氏等は方氏の言う「大家」には当たらないであろうが、殊に海外の詩人には歓迎される点も大きかった。

明清版の流布について、伝本調査を徹底していない現時点で喋々することは避けなければならないが、本稿では仮に、以下

のような見通しを付けておきたい。本書は明中期に版刻が乏しく、稀に不足本や前十卷のみの本文が刊行されたが、校訂本の明嘉靖六年（一五二七）序刊本が出て一画期を成し、実際同版には伝本も多かった。またこれを契機として、明代後葉には版種が多くなり、その中には学者の校訂を謳うもの、巻を開いて二十二卷とし増加を装うものなど、通俗の版本も含まれていた。

『格致叢書』本まで数えると、これらの明版は九種に上るが、その中の〔明〕刊十卷本と、最も有力であった嘉靖刊本を合成して完成された〔清〕刊十乃至三十卷本は、補刻を伴い長く広く行われた。十種近い版本の乱立も、清前期にはこの一版に収斂したが、これらは皆、〔元〕刊本より出で不足がある上、前後別々の本を合わせた形の、特殊な本文であったため、民国時代になって日本の版本が知られるようになるまで、本書の全形に接し得た者は極めて少数であった。

冒頭に述べたように、本書の我が国への伝播は鎌倉末に遡るが、実際の伝本上にその跡を尋ねると、まず日本〔南北朝〕刊有跋本に、実質を伴うとは言えないものの、正中元年（一三三四）の玄恵識語を有することは、あり得べきことと思われた。その時期から見て、玄恵の識語は将来の宋元版に添えられたと考え

られるが、知見し得た宋元版のうち、「宋末元初」刊本の台北国家図書館蔵本は、近代の流出に係り、室町末期頃の書人も認められ、中世以前の将来を示唆している。また王国維が明治四十四年に京都石林書屋に確認した「宋本」も同様であったか。

本書の日本での流布は、貞治六年（一三六七）に着岸した来朝刻工の翻刻によって画期を迎える。彼等のもと福建沿海部の出身であったから、建安方面の出版物にはある程度の親和性があつたであろう。日本でも『三註』や辞書、経書、杜甫、蘇軾等の別集とともに出版書目に挙げられ、本書は広く歓迎される漢籍外典の一と考えられた。

南北朝後半のうちに二版の造られたことも、大きな特色である。後出の「南北朝」刊有跋本が、同無跋本の覆刻ながら卷二十以下に大きな異同を伴うことは、明初以前版刻の増補本の将来伝存と、同本との校合が版刻の契機であり、二版を儲けるだけの受容が存在したことを物語っている。今日、両版の伝本は比較的稀であるが、それでも相国寺、建仁寺、南禅寺といった、五山禅院への浸透が認められ、本書が本邦禅林詩学の淵源の一であることを確認できる。

中世後期に於ける禅僧の文化史的役割の一は、京や鎌倉の学

問を地方へ進出させ、特に守護大名や地方の領主層と結びつく過程で、書物や学問を地方の城市に伝えたことであろう。本書の五山版は伝本に乏しく、そうした現象を窺うには必ずしも適しないが、有跋無跋相配の故宫博物院蔵本が、近江禅院への移転を伝える。そして、その伝播の最たる現象は、朝鮮朝への伝流であつた。

本書五山版の朝鮮朝への伝播は、一方的ではない両者の関係を立証する証跡として一部によく知られている。本書が如何なる契機に海峡を渡ったものか、今日では知るに由ないが、中世後期における日朝の交流と言えば、足利幕府の將軍や管領、少貳氏や九州探題、大内氏、大友氏等の西国領主層の使節派遣や、対馬宗氏の活動に加え、博多周辺の海商や倭寇の往還についても、幅広く知られるようになっている⁴³。

本書の朝鮮版が刊行された正統四年（一四三九）は、朝鮮世宗朝の二十一年、日本では永享十一年で、室町時代の前期に当たる。この頃の日朝関係と言えば、応永二十六年（一四一九）に、倭寇の頻発に業を煮やした世宗が対馬を襲撃させた、いわゆる応永の外寇が起ったが、永享八年（一四三六）には、対馬宗氏との間で渡航証明制度の採用が決まり、すでに情況が落ち着

いていた。

朝鮮国の成立以降、永享年間まで、『善隣国宝記』に見える幕府遣使に限っても五度に及ぶけれども、これらは大藏經の求請と倭寇取り締まりを主題としつつ、しばしば朝鮮朝の使節來日についても記録している。

本書の五山版が、朝鮮の首都漢城にもたらされ、大王の經筵に入った経緯を考えると、禅僧の介在する領主層以上の使節や、同等の使節の來航を、その機会とするのではないか。しかしそのいささつを示す具体的な証拠は挙げられない。ここでは、高麗版藏經の將來や、文祿慶長の役に伴う掠奪の他にも、日朝間に書物の流通があった事実のみを確認して置きたい。

今日に知られる朝鮮版『詩人玉屑』の受容者は、概そ十六世紀、中宗朝から宣宗朝間の官人宋璵、元混等であり、近世初頭には多くが日本に移され、京都鹿苑寺の禅僧、江戸の林家の儒者や祥雲寺の禅僧等、前代以来の漢学の遺風に親しむ者が手に入れ、五山版の欠を埋めた。そうした受容はやがて、新たに勃興した出版書肆の手により、附刊刊行され、新たな生命力を得て、真の流布本となった。

この和刻本が、伊藤氏古義堂や林梅洞、篠崎小竹等の思想と

感興を潤した後、国分青厓や古城坦堂を始め、近現代の詩人や漢学者を涵養し続けたことは、元来の本書本文に優れた利点があるために他ならず、建安編集家の親しんだ文学批評の世界に、要領よく接し味わえることが、その要因ではあろう。

版刻の連鎖の末にたどり着いた和刻本の『詩人玉屑』は、同じ本文から出発しながら、不足と不整合の多い清版とは対照的な性格を有つに至ったから、明治以降、日中間の交流に伴い、中国への回帰を始めた。和刻本に基づく王国維の校本が、今日の中国の流布本となったのは、その目覚ましい成果と言えるが、そうした版本成立の過程を確かめておくことは、決して無意味ではないし、現に本文系統の全体を見渡した結果、〔宋末元初〕刊本に次いで、本邦南北朝期に刊行された五山版二種の参考価値が殊に高いことと知られた。今後はその本文を活用することが、広く望まれる次第である。

〔注〕

- (1) 張健氏「魏慶之及『詩人玉屑』考」(『人文中国』第十輯、二〇〇四、會谷佳光氏訳「魏慶之と『詩人玉屑』」〔橄欖〕第十二号、二〇〇四) あり) 指摘。以下、本稿の全般に涉り、張氏の論考(會谷氏訳文)

を参照した点が多い。

- (2) 魏慶之の作は、『千家詩選』後集卷三「謝見訪」門に「嚴笑庵來訪」詩を、『聯珠詩格』卷八「用不作字格」編に「贈寫神傳生」詩を載せる。

- (3) 『聯珠詩格』卷三「四句設問格」編に蔡正孫「寄訊魏梅墅」詩を載せ、題下に「故友魏梅墅天應、菊莊之子、一鄉之快士。與余四十年交遊、忘於醉鄉吟社中。眞一時樂事。今亡矣夫、惜哉」と述べている。

- (4) 記文にある「前關白」とは、二条道平を指すかと思われる。この点について、小川剛生氏の指教を得た。

- (5) 花園院は、元弘二年（一一三二）三月二十四日、為兼薨伝に附した歌論の中でも、やはり『文筆眼心抄』と共に、本書を歌道にも通ずる奥義を述べた書物と推奨している。

- (6) 原文には「吟詩喜作豪句須不畔於理（中略）石敏若橘林文中、詠雪有燕南雪花大於掌、冰柱懸簷一千丈之語 豪則豪矣。然安得爾高屋耶。余觀李大白北風行云、燕山雪花大如席、秋浦歌云、白髮三千丈、其句可謂豪矣」とあって、必ずしも石彦と李白の句を同列には論じていないが、虎関の説は、比較すること自体不適切という意であらうか。

- (7) 例えば『空華日用工夫略集』応安五年（一一三七二）五月二十八

日条に「撿玉屑詩、與謹子誦之曰、喚婢打鴉兒、莫教枝上啼、啼時驚妾夢、不得到遼西」と見える。これは『詩人玉屑』卷五「初學踐徑」門の「詩要聯屬」章に「大概作詩、要從首至尾、語脈聯屬、如有理詞狀。古詩云、喚婢打鴉兒、莫教枝上啼、啼時驚妾夢、不得到遼西。可爲標準（室中語）」とあるのに拠っている。

- (8) 『耕雲口伝』「本歌取様之事」編の「此法詩家にも有也。黃山谷（てい）か點（てい）南の十絶は、白樂天か詩を取て、或三四字二字をなをせり」とするが、『詩人玉屑』卷八「点化」門「精彩数倍」章に『韻語陽秋』を引き「山谷點南十絶七篇、全用樂天花下對酒、渭川舊居、東城尋春、西樓、委順、竹窗等詩、餘三篇、用其詩畧點化」等と見えている。

- (9) 世阿弥作とされる『竹雪』の「いつを呉山にあらねども、笠の雪の重さよ、老の白髪となりやせん。戴く雪を払はん、先づ笠の雪を払はん」の句は、『詩人玉屑』卷二十「禪林」門「無蔬荀氣」章に『西清詩話』を引き「東坡言、僧詩要無蔬荀氣（中略）天聖間閭僧可士、有送僧詩云（中略）笠重吳天雪、鞋香楚地花（下略）」と見える対の、出句に拠ると言う。

- (10) 中村幸彦氏「石川丈山の詩論」（『中国古典研究』第十九号、一九七三、『中村幸彦著述集 第一卷』（中央公論社、一九八二）再録）参照。なおこの論考には、近時伊藤善隆氏による批判的再検討が

あった。同氏「丈山の杜甫受容―拙をキーワードとして―」（『和漢比較文学』第四十八号、二〇一二）。

(11) 北京・中国国家図書館收藏。

(12) 王仲聞氏「校勘記前言」に「日本寛永刻本従高麗刻本出（聞傳増湘氏曾藏有高麗刊本、或爲寛永刻之祖本）、每半葉十一行、行二十一字、與王先生所見宋本行款相同」とある（校勘記中には「朝鮮本」と称する）。

(13) 注（一）張氏論文、本書卷十七「半山老人」門「秋菊落英」章末に小字にて「余按（中略）西澗葉公每誦先君菊莊翁菊似交情看歲晚、枝柯相伴到離披之句、謂其真知菊者、故併及之。梅墅續評」の文を存するのは、魏慶之（号菊莊）の息男天応（号梅墅）の附言と見られ、慶之を「先君」と称することに拠る。また黄昇（号玉林）評語の重掲も、統編の傍証とする。

(14) 本版は王国維のいわゆる宋本に当たること、注（一）張氏論文に指摘がある。

(15) 王国維題識に「宋本於宋諱惟貞字皆闕末筆、餘如曙桓構脊惇等、均未嘗避。然如十九卷第五頁姬作姫、乃避度宗嫌名、則割廟當在咸淳德祐間、或竟在宋亡以後。於故主之外、但避貞字。仁宗德澤入人之深如此」とあり、度宗朝（一二六四―七四）以後、元初以

前の版刻とする。本版の刊行は少なくとも魏慶之歿後と考えられるが、魏氏は恐らく宋咸淳四年（一二六八）以降、元至元二十年（一二八三）以前に歿しているから、その後間もなく出版されたのである。版式字様もこの頃のかたと見て、当面（宋末元初）刊本と称する。

(16) 阿部隆一氏『中国訪書志』（一九七六、汲古書院、一九八三増訂）に「〔元〕刊本」と標示、「楊守敬により購得逆輸入された本」と録し「楊守敬は宋刊と考えていたが、覆宋元刊で、天統目（『天祿琳琅書目統編』、稿者注）・莫編（『五十万卷樓藏書目錄初編』、同）莫跋（『同群書跋文』、同）著録本は同版か。我が国の南北朝刊本は此と版式行格を同うし、宋版かこの元版のいずれによったか詳かでないが、ほぼ覆刻の関係にある」と論じている。但し斯道文庫補編「宋元版所在目錄」（阿部隆一遺稿集 第一卷 宋元版篇）（一九九三、汲古書院）に該本を、「宋刊」とする次掲の北京大学蔵存卷四至七本とは別版とし、「元刊」とする後掲の同蔵存卷一至十七本と同版としているのは、錯誤があろう。

(17) 『木樨軒藏書題記及書録』。

(18) 以下本書の校勘につき、卷一、二、十九、二十の範囲についてのみ述べることを遺憾とする。但し挙例は卷一とし、必要に応じ

て他巻に言及する。

- (19) 注(17)『書録』。また該本は、近年刊行『中華再造善本』金元編収録の、本書の底本である。

- (20) 川瀬一馬氏『五山版の研究』(一九七〇、日本古書籍商協会)。

- (21) 注(20)川瀬氏著書。陳仲は応安四年(一三七一)陳孟榮刊『宗鏡録』、同七年刊『北磻詩集』『同文集』、永和二年(一二七六)刊『重新点校附音増注蒙求』、刊年不明の『新板大字附音釈文千字文注』『新板増広附音釈文胡曾詩註』『藏叟摘藁』『十牛図』(大字本補刻)、『聚分韻略』(九行本補刻)、『金玉編』、陳伯寿は刊年不明の『仏祖歷代通載』、『王狀元集百家註分類東坡先生詩』『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』『陸放翁詩集』『皇元風雅』『魁本対相四言雜事』に見える。但し本版に工名の存することは、川瀬氏の著録に漏れている。なお川瀬氏解題に拠ると、本版に現所在不明の小汀文庫旧蔵本があつて、永徳二至三年(一三八二—三)の識語が見えるという。これに従うと、本版は貞治六年以後、永徳二年以前(一三六七—八二)の刊行となる。陳伯寿は福州の出身であることが、義堂周信の『空華日用工夫略集』応安三年(一三七〇)九月条に「唐人刮字工陳孟才、陳伯寿二人來、福州南臺橋人也。丁未年七月到岸」と見える。南臺橋とは、閩江の支流で福州府閩県を流れる南臺江に懸けられ

た、南臺万寿橋であろう(『八閩通志』巻四)。

- (22) 『新修成實堂文庫善本書目』。

- (23) 該本に見える「杉恒繕／珍藏記」の印記は、従来蔵書印譜類に、首行を「杉恒繕」と読んで、山田椿庭の所用とされるが、後述する(明)刊二十二巻本の愛知県立大学図書館蔵本に、向山黄村の書友として見える杉本恒繕氏の所用であろう。該本と同じく、同類所鈐本は多く楊守敬の獲得する所となったが、その中には漢方の医書が目につく。或いは幕府医官の杉本樗園の後人か。注(16)阿部氏著書、真柳誠氏「台湾訪書志」故宮博物院所蔵の医藥古典籍(一)至(三十七)「漢方の臨床」第四十九至五十四号、二〇〇二至七)参照。

- (24) 本版の様式を六張一版と見るについては、他にも例証がある。本版には耳格があり、また本版の京都大学附属図書館蔵本は書腦部辺外の餘白が殊に広いことから、各張印面の連属がよく観察される。その中でも巻十二第十七張(尾)より巻十三第五張までの六張は、三張ずつ連接することが確かめられ、一組は、版木を想定した場合の向かって左から巻十二第十七張、巻十三第五張、同第四張、もう一組は同じく巻十三第三、二、一、もしくは第一、三、二張の並びと認められる。これは例外的に版下書の定位が張

数に従わなかった場合に相当し、六張の範囲内でその順序が変化したものと推察される。このような現象は他にも、国立歴史民俗博物館蔵日本〔南北朝〕刊本『祖庭事苑』、同蔵日本〔南北朝〕刊本『翻訳名義集』にも見出された。

(25) 『岩崎文庫貴重書誌解題 Ⅰ』。

(26) 本版については藤本幸夫氏『日本現存朝鮮本研究 集部』(二〇〇六、京都大学学術出版会)を参照した。

(27) 拙著『中世日本漢学の基礎研究 韻類編』(二〇一二、汲古書院)第二章第一節に述べた。

(28) 注(22)『書目』。蘇峰は日本統治下における朝鮮で「京城日報」監督の任務に就き、新聞発刊の事業に関わり、大正七年に辞するまで毎年のように京城に通って、多くの朝鮮版を入手したが、本書の場合、京城獲得の本は残本一部のみ、他の完本二部は日本伝来である。安藤英男氏『蘇峰 徳富猪一郎』(一九八四、近藤出版社)参照。なお天理図書館には同版又一本を存する由であるが、未確認。『天理図書館稀書目録 和漢書之部 第四』参照。

(29) 本版の田原仁左衛門の刊記も字格に不齊の点があり、無刊記本の先行する『文選』や『聯珠詩格』の附訓本のように、刊記の様相を異にする早印本の行われた可能性もあるが、現在までそうし

た伝本に接し得ないため、本稿では寛永十六年の田原仁左衛門印本を初次と著録した。芳村弘道氏「和刻本の『文選』について——版本から見た江戸・明治期の『文選』受容——」(『学林』第三十四号、二〇〇二、『唐代の詩人と文獻研究』(二〇〇七、朋友書店)再録、拙稿『旧刊『聯珠詩格』版本考』(『斯道文庫論集』第四十三輯、二〇〇九)参照。なお長澤規矩也氏『和刻本漢籍分類目録』(一九七六、汲古書院)には「〔寛永〕刊〔覆朝鮮〕と別に「同〔寛永一六印、京、田原仁左衛門〕」と、『和刻本漢籍隨筆集 第十七卷』(一九七七、汲古書院)に収める本版の解題には「寛永中刊寛永十六年九月(一六三九)京都田原仁左衛門印本」と標するが、そうした初刻の伝本に接し得ない。

(30) この点について、注(29)長澤氏目録は「釋玄惠點」とするが、同解題では「點者は玄惠ではない」と明確に否定されている。

(31) 本版では「未」と「末」は殆ど混用されているが、諸版との相異として取り上げる。

(32) 元禄九年(一六九六)河内屋喜兵衛刊行の『増益書籍目録大全』「儒書」の項に「〔十ノ角ヤ〕・詩人玉屑〔十五ノ又〕」の登録があり、宝永六年(一七〇九)丸屋源兵衛修本も同じ。なお刊地は『勅諭国英法鑑禪師天倫和尚語録』の刊記に「京師一條街」とあり。

(33) 元禄九年丸屋源兵衛刊、正徳五年（一七一五）修刻の『増益書籍目録大全』「儒書」の項に「（丸や源／舛）・詩人玉屑（シシンキヨクセウ）十八匁」とあるのは、版權が丸屋瀬尾源兵衛と榊屋川勝五郎右衛門に移ったことを示しているよう。

(34) 僉憲は僉都御史の意であるが、或いは巡按御史か。井上進氏「版本探求の意味、面白さ」〔斯道文庫論集〕第四十六輯、二〇二二参照。

(35) 図版七―四参照。この印記について、近時芳村弘道氏の著録があった。芳村氏『故黄萬居氏寄贈漢籍古書分類目録』（共編、二〇一一）。

(36) 該本の所在について、堀川貴司氏に教示を得た。識語に見える杉本氏について、楊守敬『留真譜』初編の元龜二年（一五七一）識語本『論語集解』の題識に「是本每冊後皆有元龜二年題識。書估從西京販來、爲杉本仲溫所得、借而校之。大抵與正平本合也」と記しているが、この杉本氏は楊氏の書友であり、幕府医官杉本樗園も字を仲溫と言ったから、その後人か関係者であろう。注(23)参照。また該本卷二十識語に見える劉慶汾は、清朝外交官で東翻訳兼箱館副領事。陳捷氏『明治前期日中学術交流の研究』（二〇〇三、汲古書院）指摘。

(37) 『改訂内閣文庫漢籍分類目録』等。

(38) この改編が底本以来のものかどうか、未確認。注(1) 張氏論文にこの部分を取り上げ、明嘉靖六年（一五二七）序刊本潜仙氏序に言う湖南刻十卷本をその淵源と見ておられる。その可能性は否定できないが、本稿で該版の底本と見ている（明）刊十卷本は、正徳嘉靖頃の様式を備えた版本であり、天順を遡るような古版とは見られない。なお張氏は十卷本と、いわゆる道光刻本を比較して、同一の本文と指摘されているが、本稿ではこれらは、一版の増補修と見ている。

(39) （明）刊十卷本との精校を経ないことと、明嘉靖六年序刊本との比較の便宜から、（元）刊本と対校した。

(40) 『天理図書館稀書目録 和漢書之部 第四』に「（元）刊」と著録。

(41) 『藏書紀事詩』卷七附録二十三首参照。

(42) 『桐江集』卷七の「詩人玉屑攷」（『宛委別蔵』本に拠る）に「詩人玉屑二十卷、建安魏慶之醇甫所集也。淳祐四年甲辰黃易叔陽爲序。魏號菊莊、黃號玉林。黃亦有詩話及中興絕妙詞選、行世。序謂玉屑勝漁隱叢話、不然也。漁隱編次有法。先書前賢詩話文集、然後間書己見、此爲得體。他人與玉屑往往刊去前賢標題、若己所言者、下乃細注出處、使人讀之、如無首。然又或每段立爲品目、殊可憎」

厭。況又不能出漁隱度外、其前載諸賢詩評、不過增南渡以後諸公議論。如朱文公、楊誠齋、趙章泉語、吾無間然。嚴滄浪、姜白石評詩、雖辨所自爲詩不甚佳。凡爲詩不甚佳、而好評詩者、率是非相半。晚學不可不知也。其詩體句法之類、與李叔郭思無異。其後歷叙三百篇漢魏、以至南渡人別爲異、即漁隱條例耳。閩人有非大家數者。特書之亦可刪也」とある。

(43) この点について、袁明青氏「『詩人玉屑』引書考」(『中国詩学』第十六輯、二〇一二)に考証がある。

(44) 関周一氏『中世日朝海域史の研究』(二〇〇二、吉川弘文館)、橋本雄氏『中世日本の国際関係 東アジア通交圏と偽使問題』(二〇〇五、吉川弘文館)等。

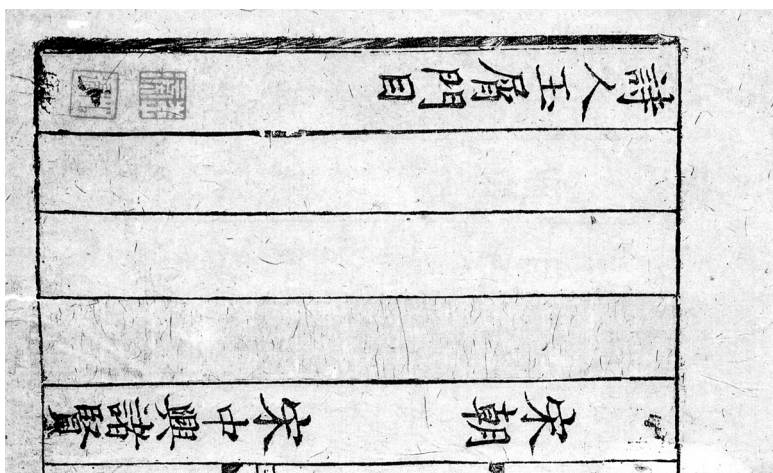
圖版一一（宋末元初）刊本·目尾·台北國家圖書館藏

本朝	中興諸賢
禪林	方外
閨秀	靈異
詩餘	
詩人玉屑目	

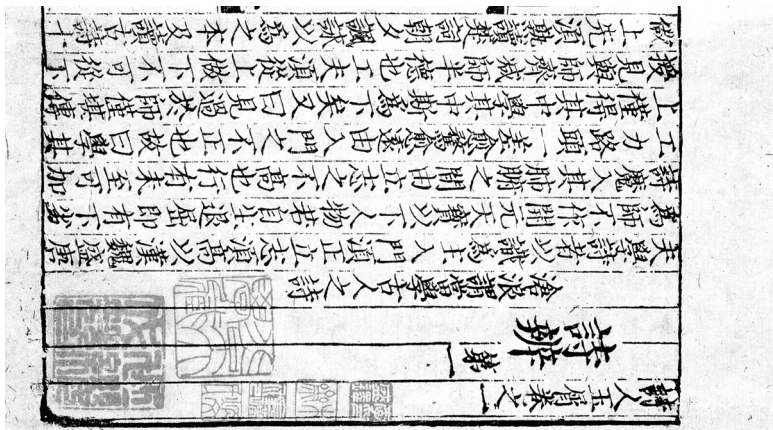
圖版一二 同·卷首

詩人玉屑卷之一	詩辨
夫學詩者必識為主。公門源正。其源動以漢魏盛唐。為師。不依開元天寶以下人物。若自生退屈。即有下劣。詩魔入其肺腑之間。由立志之不善。也行有未至。可加。工力路頭。一差。便為愈遠。由入門之不正也。故曰學其上。僅得其中。學其中。斯為下矣。又曰。見過於師。僅堪傳授。見與師齊。減師半德也。工夫源微。上微下下。不可從下。故上先須熟讀。美詞。朝又觀。誠以。卷之。李。張。讀。古。詩。十。	

図版二二 (元) 刊本・目尾・北京大學圖書館藏（中華再造善本に拠る）



図版二二 同・卷首



夫學詩者以識為主入門須正立志須高以漢魏盛唐
為師不依間元天寶以下人物若自生退屈即有下劣
詩魔入其肺腑之間由立志之不高也行有未至可加
工力路頭一差愈覺愈遠由入門之不正也故曰學其
上僅得其中學其中斯為下矣又曰見過於師僅堪傳
授見與師齊城師半德也工夫須從上做起不可從下
做起先須熟讀楚詞朝夕觀誦以為之本及讀古詩十

滄浪謂當學古人之詩

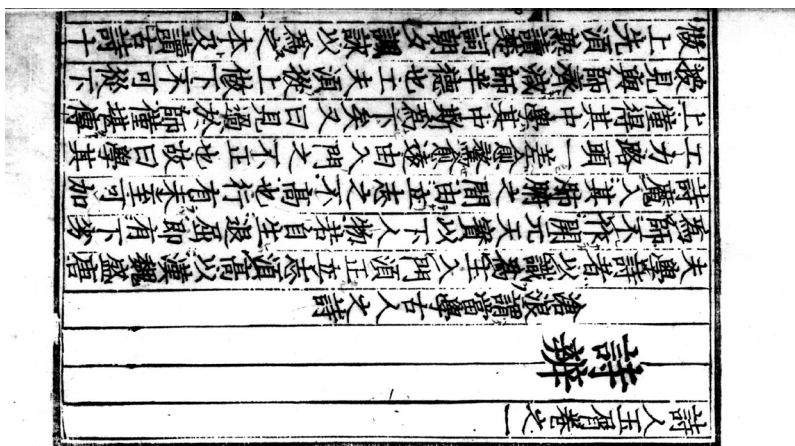
詩辨

第一

本朝	中興諸賢
禪林	方外
閨秀	靈異
詩餘	
詩人玉屑明目	

詩人玉屑卷之一	詩辨	滄浪謂當學古人之詩	夫學詩者以識為主入門須正立志須高以漢魏盛唐為師不作開元天寶以下人物若自生退處即有下劣詩魔入其肺腑之間由立志之不高也行有未至可加工力路頭一差愈覺愈遠由入門之不正也故曰學其上僅得其中學其中斯為下矣又曰見過於師僅堪傳授見與師齊減師半德也工夫須從上做下不可從下做上先須熟讀幾詞朝夕觀誦以為之本乃讀古詩十
---------	----	-----------	---

圖版三一 同・卷首



詩至角卷之二十一

靈異

湘中女

青鳥難傳射渚湘中宮子驤樓夜覓女子謠詩云紅
樹斷秋色最堪憐夜縱佳期不可再風雨杳如年頃刻
不見離魂最

思仙

秦皇宴秦水綠海榮開靈臺香玉滌復宮前白髮人
猶唱開元太平曲忽然湖上片雲飛不覺舟中雨濕衣
折得荷花便忘却更將綠葉頭歸嘴口湖波初渺漫
運舟縱橫桃花難夢心不離空闌去會將歸回再離情

錢雲吹破星律飛流銀河搖蕩只恐水輪墜層樓穩上
璇樓今夜無多恨覺浮生早沈回期僵薄似蟾空淚庫
想得九天高絕不比人間更火獨立乾坤浩歌看雲
可惜無人和廣寒宮裏有誰蕭灑如我

詩入玉角卷之廿一

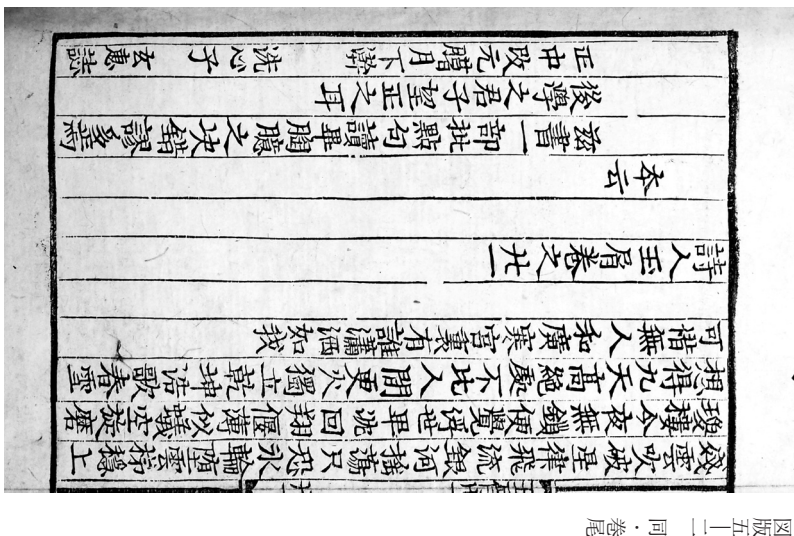
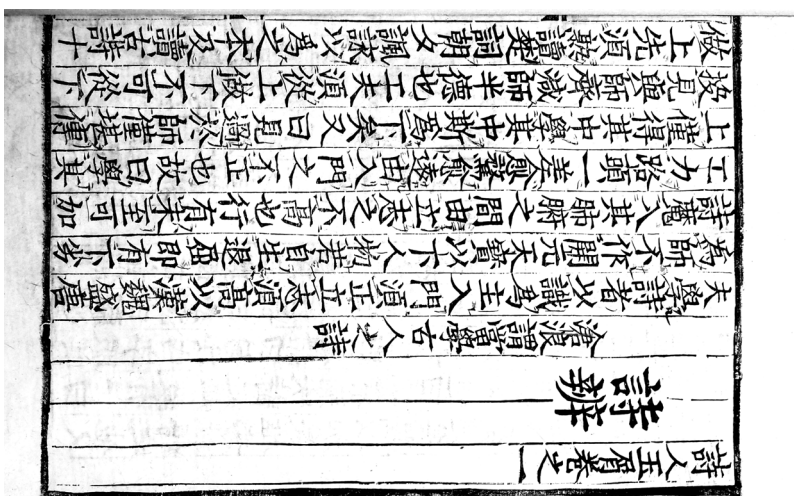
本云

茲言一部批點句讀臚胸臆之決錯謬多焉
後學之君子望正之耳

正中改元曙月下辭 恍必子玄惠識

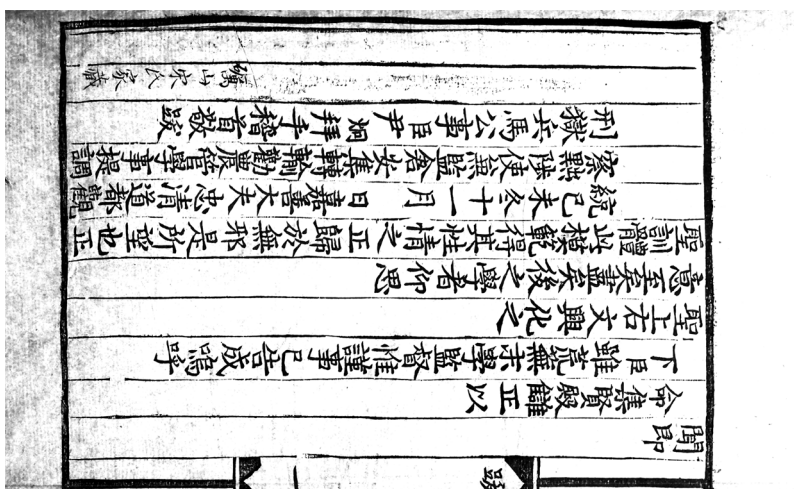
施聖老禪寺祖西

圖版五十一 朝鮮明正統四年（一四三九）版刊本，卷首，國立公文書館內閣文庫藏



圖版五十二 同，卷尾

圖版五十三 同，跋尾宋氏識語



圖版五十四 同，大尾



詩人玉屑卷之一

詩辨

滄浪謂當學古人之詩

夫學詩者以識為主入門須正立志高以漢魏盛唐為師不依閑元宋賢以下人物若何生退為即有下劣詩魔入其肺腑之間由立志之不高也行有未至可加于乃路頭正差愈覺遠由入門之不正也故曰學其上僅得其中學其中斯為下矣又曰見過於師僅堪傳授見與師齊減師半德也工夫須從上做工不可從下做工先須熟讀楚詞朝夕諷詠以為之本及讀古詩十

詩人玉屑卷之二十一

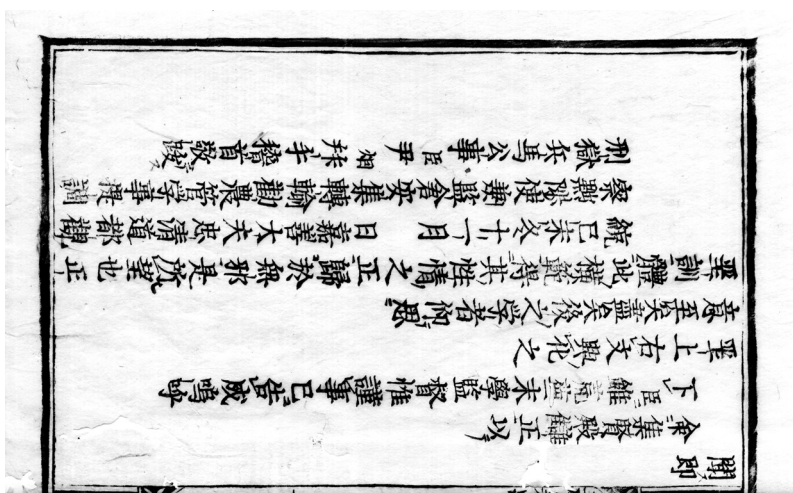
本云

茲書一部批點自讀畢胸臆之快錯謬多耳
後學之君子望正之耳

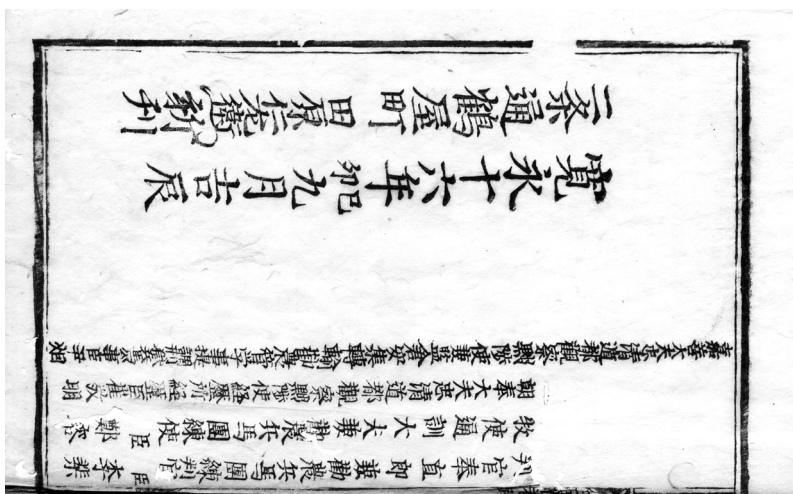
正中改元臘月下泚

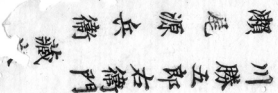
沈心子 玄惠誌

圖版六二三 同，跋尾



圖版六一四 同，大尾刊記





圖版七十一 明嘉靖六年（一五二七）序刊本・序末・國立公文書館內閣文庫藏

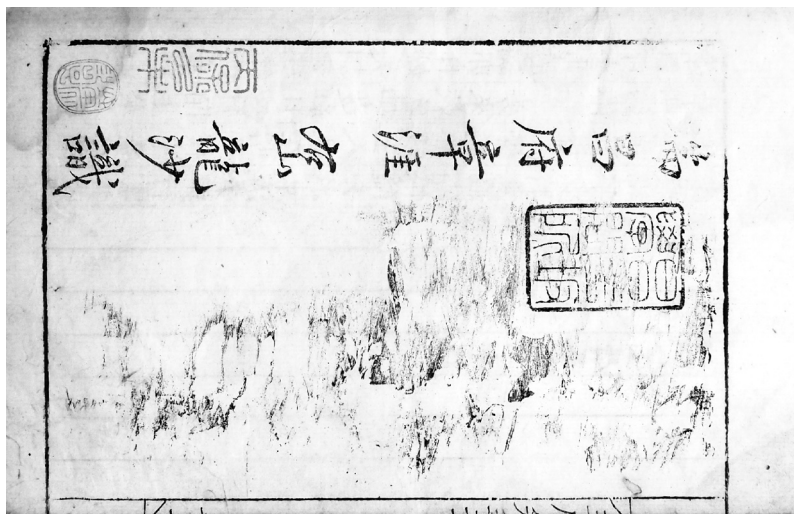
予近翫知清者校閱一過則祇補遺
乃重刻焉嗚呼予學詩三十年愧不
能闕古人之端翰而安敢置喙於其
間聊書此以識歲月爾
嘉靖六年丁亥冬十有二月八日
洪都玉岑潛仙識

王傳
煙崖

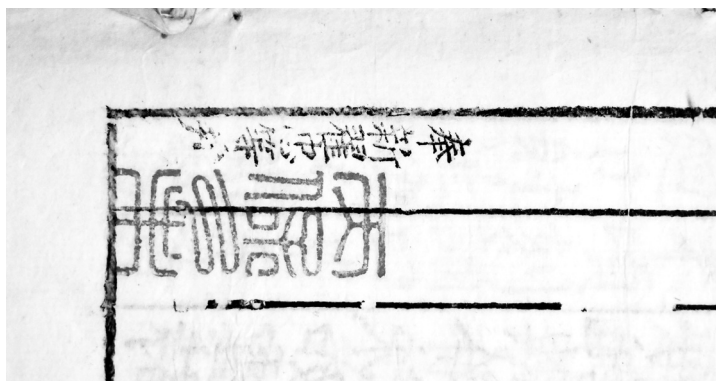


圖版七十一 同・卷首

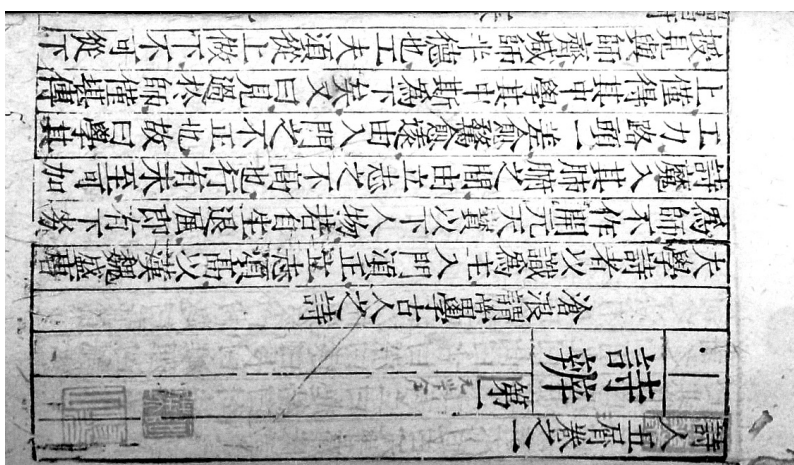
詩人玉屑卷之一
詩辨 第一
徐浪謂當學古人之詩
夫學詩者以識為主入門須正立志須高以漢魏盛唐
為師不作開元天寶以下人物若自生退屈即有下劣
詩魔入其肺腑之間由立志之不高也行有未至可加
工力路頭一差愈驚愈遠由入門之不正也故曰學其
上僅得其中學其中斯為下矣又曰見過於師僅堪傳
授是與師齊減師半德也工夫須從上做下不可從下
做上先須熟讀楚詞朝夕諷詠以為之本及讀古詩十



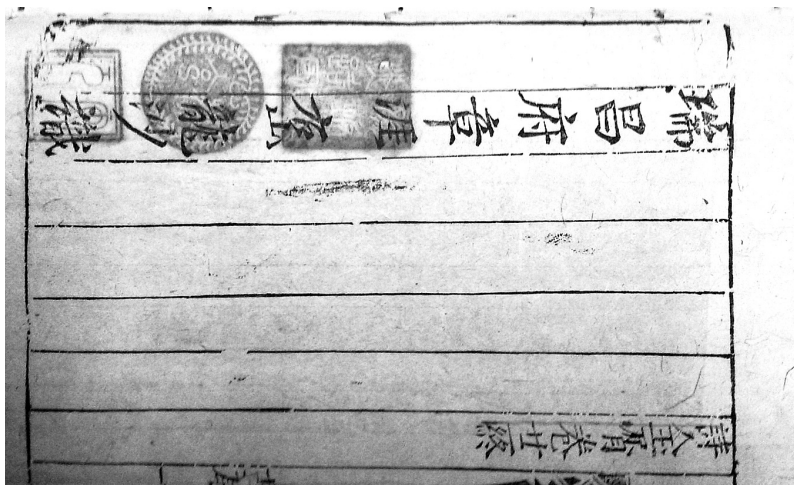
図版七十四 同・大尾



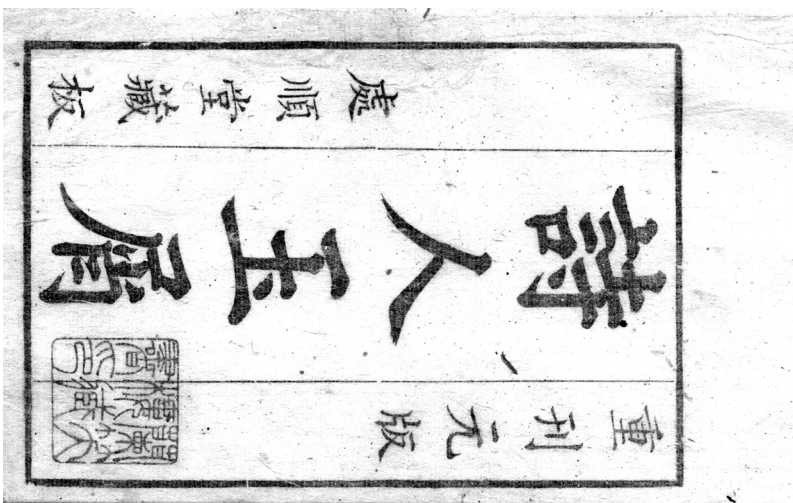
図版七十三 同・卷十尾刊記



圖版八一 同・大尾



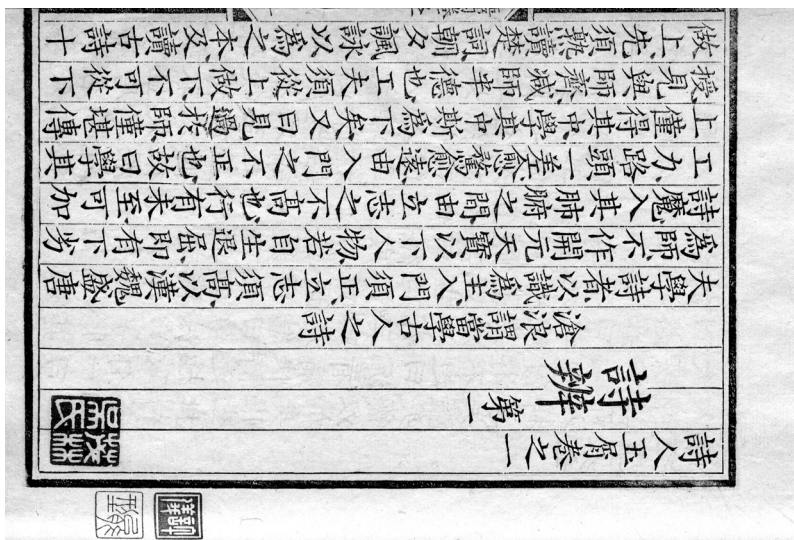
圖版九十一 「清」刊增修二十卷本·封面·堀川實司氏藏



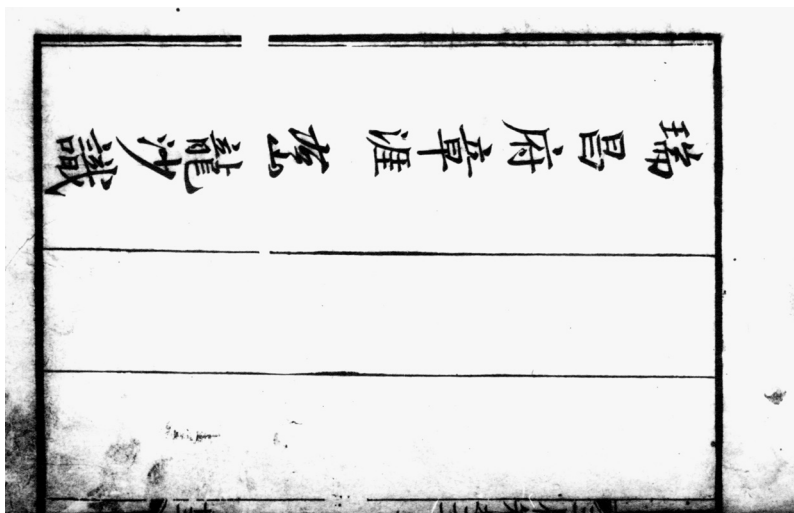
圖版九十二 同·首

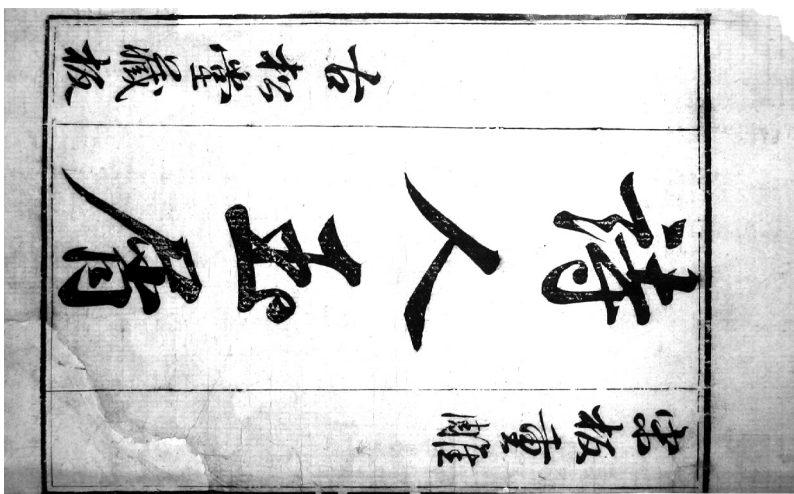


圖版九十三 同，卷首

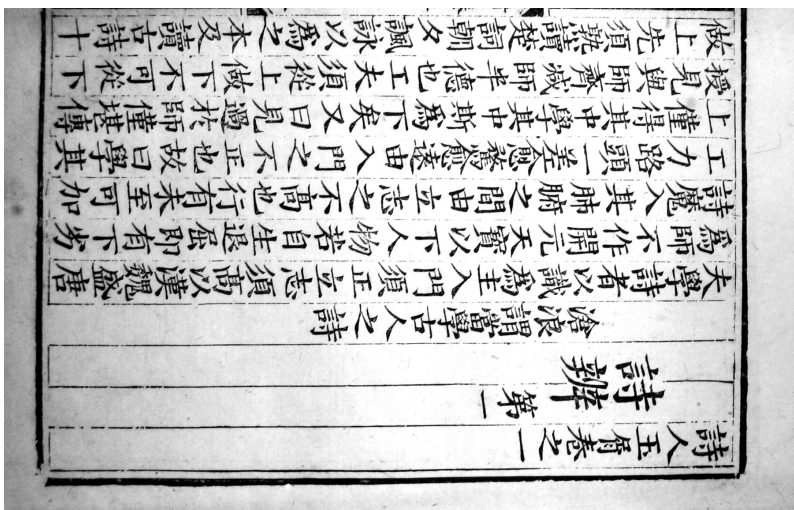


圖版九十四 同，大尾，天理大學附屬天理圖書館藏





图版十一 一通修本·封面·米国議会図書館蔵



图版十一 二同·卷首

